流れる夜兎の血――罪か、希望か――

洒流奇

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
流れる夜兎の血――罪か、希望か――

【Ｎコード】
Ｎ４４６７Ｘ

【作者名】
洒流奇

【あらすじ】
夜兎族の人間とある日出会う銀時と神楽。そして、その人間が教えてくれた情報に疑問を抱きつつも放置した二人に災難が降りかかる。
そして、夜兎の驚きの肉体構造が……！？
取りあえずシリアス！
ダメダメな文や、キャラ崩壊の可能性も！

大丈夫な人はどーぞ！！

日常送ってると非日常に憧れるけど、非日常を毎日送ったら、それが日常になる

荒くれ者が集う街――歌舞伎町。
この街にまた――狂ったモノが入る。

万屋と書かれた家の中では三人の人間が怠そうに目を開いていた。

「あぁ…全然仕事が来ねぇ…オイ、新八」

椅子に座っている銀髪の天然パーマの男――坂田銀時が眼鏡の少年の名を読んだ。

「何ですか？」

ソファでお茶を啜る眼鏡の少年こと、志村新八は適当に言葉を返す。

「ジャンプ買って来い」

新八が固まった。
やがて、

「ハァッ！何言ってんの！」

シャウトした。

「今お金が無いの知ってんですか銀さん！？今日の昼御飯も心配な所なんですよ！」

「そうアル！ジャンプを買うんじゃなくて酢昆布を買って来るアル！」
チャイナ服の少女――神楽が新八と銀時に向かって叫ぶ。
ブチッと新八の血管が切れる音がする。
「ねぇ聞いてた神楽ちゃん！？今さっき昼食も食べれるか食べれないかの瀬戸際って伝えたよね！？酢昆布を買える訳ないでしょう！？」
「知らないアルか？酢昆布は神の食物であり、また、神が髪が生えるようにと願った食材でアルよ？」
「ツッコミ所満載でもうツッコミきれないよ」
叫ぶ新八はハァと溜息を吐いて、
「もう良いです…僕一旦家に帰ります…」
ぽつりと虚ろな瞳で言った。
「おーい新八君。君は頭までおかしくなったのかね？君の家にはダークマターが待っているんだぞ？」
先生風の言葉を出す銀時。
因みにダークマターとは、志村新八の姉、志村妙の作る卵料理を言う。
その卵料理は料理と表記しても良いのか分からぬ、こんがりと焼けた黒こげなモノ。

「だからって…此処に居たって無駄にエネルギーを消費するだけですよ…」

「駄目アルよ、新八。…生きてても良い事アルよ。だから死んじゃ駄目アル」

「…何で僕がリストラされて自殺しようとしている会社員って感じなの神楽ちゃん？」

「だって新八アルよ？あの添加の新八アルよ？」

「うん、添加じゃなくて天下だよ神楽ちゃん」

「新八はそんなに偉くないアル」

「神楽ちゃん…君は何がしたいんだい…？」

疲れきったように聞く新八に目を輝かせて神楽は答えた。

「バイバイ新八。ちゃんと逝くあるヨ」

神楽が涙ぐんだ瞳を隠して手を振る。

「新八…今までありがとな…」

銀時も悲しそうに笑いながら手を振る。

「ちょっと待ってー！だから僕死なないって！何言ってんのあんた達！フラグたてんな！」

「K・Yあるな新八」

「有り得ないな新八」

二人ともハァと溜息を吐いて頭を振る。

「ねぇ壊して良い…？テメェらの頭をぶち壊して良い？」

新八はガックリうなだれると「では家に帰ります」と言ってドアを開けて去って行った。
銀時はフゥと息を吐いて、

「ツッコミ居なくなったらどうするのコレ？待てよ…此処で俺がツッコミに回って役を広げてみるのも…」

「銀ちゃん」

「ちょっと待て神楽。今良い感じに何か閃きそうなんだ」

「定春」

「定春ぅ？そこら辺にでも…」

バッと体を起こして定春を見る。
定春と言う名の犬がプルプル小刻みに震えていた。

「オイッ此処ですんな！神楽！」

「アイッ！」

神楽は元気良く声を出すと通常よりも大きすぎる定春の首輪を掴んで、

「此処ですんなぁー！！」

外に投げ飛ばした。

「違うー！違うよ神楽ちゃん！俺はね、ビニール袋を用意しろって意味で君を呼んだんだよー！？」

銀時がビニール袋を急いで探す。

「人間、ミスがあるのが当然あるヨ？」

「格好良くないからね！全然格好良くないからね神楽ちゃん！？」

もうオカマのような奇声を発した銀時はビニール袋を手に外に向かう。

「すいませーん！離れてて下さーい！今処理するんでー！」

下にはキャアッと叫ぶ着物姿のおなごや「何じゃこ奴…」と定春を見つめる男達が居た。

「すいませーん！」

銀時は再度謝ると定春に駆け寄る。

両目が×になっている定春の近くには――

モザイクがかかったモノがあった。

「何やってんの定春ー！？」

既に気絶している定春にどう叫んでも意味は無いのだが叫ばなきゃ落ち着かない銀時。

「銀ちゃーん。私酢昆布買ってくるアル」

「待ってー。この状態で何で酢昆布ー？銀さんを手伝ってあげようという君の善意はー！？」

「善意？ふっそんなモノとうの昔に捨てたわ」

「格好良くないよー！全然格好良くないからねー！」

「ウルセェお前ら！とっとと店の前からそのデカブツを取り除けー！」

突如、万屋の下の店の主、お登勢が銀時達の会話に加わる。

「ソウダヨコンチキショー。早ク消エテ私二遺産ヲ寄越セ」

カタコトな日本語を発する女――キャサリンもソレに加わる。

「テメェに渡す胃酸何て無いネ！とっとと眠りやがれコノヤロー！」

小銭を手にした神楽はキャサリンに絡む。

「遺産ノ字ガ違ウヨ馬鹿ヤロー！」

「知るアルかバカヤロー！」

こんな馬鹿な事を日々やる万屋達。
ギャイギャイガヤガヤ
五月蝿くて、楽しいモノ。
だが、その日は何時もと違う事が起こった。
五月蝿くしている銀時達の横を傘をさした人が通る。

「あっ…」

神楽の動きが止まる。
ポカンと口を開けて呆けた顔で見つめる。
銀時は「何だよ」と言い、頭を掻いて神楽の視線の先を見た。
銀時の目が見開かれた。
日差しが暖かい春の日に傘をさす人間が視線に気付いてか振り返る。

「…何だよ？って…」

その人間も動きが止まった。
白い肌に茶髪の天然パーマ。
チャイナ服を纏って、

血の臭いがする少年だった。

「坂田銀時…と神楽…か」

少年は独り言を言うと、

「じゃあな」

猛ダッシュした。

「待つアル！」

神楽が少年を追う。

「神楽！」

銀時も神楽を追った。

何か肩書きが有ると格好良い気がするけど、逆に肩書きに負けて地味な奴もいる

銀魂初投稿！！

８月からずっと考えていたモノです！！（てかただずっと書いてた）

感想どしどしお願いします！！

何か肩書きが有ると格好良い気がするけど、逆に肩書きに負けて地味な奴もいる

「ハァハァ…神楽アイツ！」

荒い息を規則正しく出しながら銀時は横に並んだ神楽に聞く。

「ハァハァ…アイツは…夜兎アルよ…！」

前で走っている少年はどんどん人気の無い所に行く。

「テメェ待ちやがれ！」

銀時は意味が無い事を理解しながら叫んだ。

「りょーかい」

元気な声が銀時達の耳に届いた時、
少年は止まって此方に顔を向けていた。
銀時達も足を止める。

「でさ…何？俺何かした？」

少年は自分が日陰に居る事を確認すると傘を閉じる。
銀時達は少年をジッと見る。
見た感じは、神楽と同年代に見える位小柄だった。
茶色の髪は日陰なのに輝いていた。
金色の色に間違えそうな色合いだ。
そして、神楽よりは少し身長は高いだろう。
目線が神楽の少し上であった。

纏っているチャイナ服は少し大きいのかブカブカだ。

「…お前」

神楽が口を開いた。

「私の馬鹿兄貴の仲間アルか？」

つまり、神楽が少年に聞きたい事は――
神楽の兄、神威の事だった。

「馬鹿兄貴ぃ？あぁ、神威ね」

「知ってるアルか！？」

「うん。仲間じゃないけど、ある程度情報は持っているよ？あんた達のもね」

「…あんた達ってなんだ？」

銀時は静かに問う。

「例えば、あんた」

少年は銀時を指差す。

「しょうよう先生だっけな…？その先生の教え子で、攘夷戦争で活躍した『白夜叉』」

銀時は目を見開く。

少年は指先を神楽に向ける。

「あんたは…エイリアンバスターの娘。とある時に兄、神威が暴走してあんたの父の腕をもぎ取って消える。現在春雨第七師団で活躍中」

神楽も目を見開く。

少年は2人の過去を的確に当てる。

「で、何？神威って奴の事？確かね…」

少年は自分の顎に人差し指を置くと、

「そこの白夜叉の戦争中に一緒に活躍していた高杉晋介と手を組んだよ？」

「高杉ぃ！？」

銀時が驚きの余り声を上げた。

「えっ…もしかして知らなかった？」

驚きを隠せない様子の少年に神楽は一歩近付く。

「他には…何がアルか！」

「他…？さぁ。それ位」

神楽は勢いよく飛ぶと少年の胸ぐらを掴む。

「他も知らないアルか！？オイッ！！」
グラグラ揺らす神楽の手を少年は優しく離す。
「だぁかぁらぁー知らないって」
少年の肩に手が添えられた。
その大きな手は――銀時の手だった。
「高杉…んことも知ってんのあるのか？」
「無い」
少年は即答した。
「…分かった」
銀時はつらそうに顔を歪ませた。
少年は溜息を吐く。
「何で俺が悪者的な扱いなんだよ？情報をあげたのによぉ？」
「いや…悪い…」
「うわあぁっ…」
神楽は涙を流した。
「おっ…おいっ大丈夫かよ！？」

「神楽落ち着け…なっ？」
銀時は神楽の背中をさすった。
「うぅっ…ありがとナ…」
神楽は涙を拭う。
「おっおう…」
少年は慌てた様子でいた。
ピーポーピーポー
そんな三人にパトカーの音が響いた。
「何だ…？」
銀時は周りに視線を向けて少年に視線を移した。
その時には――消えていた。
「えっ！？何処に行ったアルか！？」
「はい此処ー」
「！？」
少年が居た先は――

近くの二階建ての建物の屋上だった。

「何時の間にアル！？」

「ハハハッ」

少年は笑うと腰に有るポーチから何かを取り出す。

『そこまでだ半殺し屋！』

スピーカーによって大きくなった声が反響する。

そして幕府の犬――真選組がやって来た。

「探せー！情報によると奴は此処に居るんだー！」

鬼の副長、土方十士郎が叫んだ。

「って何で旦那が居るんでィ？」

栗色の髪を靡かせた少年――沖田総悟が銀時に目を向ける。

「それはこっちのセリフだよ総一郎君」

「ちょっサドヤロー私も居るアル」

「テメェ何ざ興味無いですぜェ」

「何だと！やるアルか！？やるアルか！？」

腕をブンブン回す神楽に沖田は、

「残念だけどテメェと遊んでやる程暇人じゃねですぜェ」

「何アルか！」

沖田は何処からか出したバズーカを二階建ての屋上に居る少年に向ける。

「ちょっ…私の話を…」

「散れ」

弾が発射する前に、少年は笑った。

「残念♪」

少年は笑った。

ボンッ

沖田達の周囲に煙幕が広がる。

「総悟、バズーカを空に撃て！」

「アイサッ！」

珍しく土方の意見を受け入れた総悟は、空にバズーカを撃った――

のではなく、

土方の声がした方に撃った。

「オイッ！」

短い悲鳴をあげた土方の周りの煙幕は消えていく。

そんな土方の頭は――

「ちょっと総悟オオォォ！何で俺に撃ってんだアアァァァ！？」

「いや…ね…昔近藤さんに声がした方を撃てって言ったような言ってないような…」

「結局確証ねぇのかアアァァァ！」

総悟と土方の乱闘が始まった中勇者、銀時が土方に言う。

「多串君」

「多串じゃねぇ土方だ！」

「頭」

土方は銀時の言葉に眉間に皺を寄せたが、言われたとうり頭を触る。

チリジリになっていた。

危険なパーマをやった土方だった。

「ちょっと総悟オオォォ！？」

「いや…土方さん良い髪型ですゼェ？クスッザマァミロ」

「最後何つったアアァァァ！」

「何も言ってねぇですゼェ？」

「テメェ！」

再度二人の乱闘が始まる中、勇者銀時は土方達に言う。

「あのぉ…君たちの目的は？」

耳をほじる銀時は退屈そうに欠伸を漏らした。

「っつ！テメェら探せぇ！」

土方の命令で隊員達が蜘蛛の子を散らすように別れて探し始める。

「じゃあ神楽帰――」

「待ちやがれ」

銀時の肩をガッシリ掴む土方。

「話を聞こうかぁ？」

血管をピクピク動かす土方を見た銀時はフゥと溜息を吐いて、

「オイオーイしつこい男はモテねぇぞ？」

茶化した。

「銀ちゃんオツカレネ。私先に帰って――」

「そうはいかねぇですゼェ？」

銀時達との構図と同じように総悟はガッチリ神楽の華奢な肩を掴む。

「離すヨロシ。お前なんかに触られたくないネ」

「それは同意見だがよぉ逃げられたのはテメェらのせいだろ？」

「明らかにテメェら税金泥棒のせいダロ！離せヨ」

「嫌だね」

「コノォ！」

乱闘が始まった二人。

銀時と土方達も乱闘する。

「離せよ多串君。そんなにしつこいとほらっ、愛しのあの子も逃げて行くぅ」

「何言ってんだテメェ？殺すぞ？」

「はいっコノ人警察官としてあるまじき言葉を発したー。オメェが牢屋に入れ」

「何だとぉ！？」

…最早どっちが悪いのか分からない状態。

そんな銀時達を見つめる奴が居た。

「見ぃっけ♪」

「団長…本当にアノ話受け入れるんですかい？」

「仕方が無いだろ？ビジネスだよビジネス」

闇の中に溶けていく２つの影。

この二人によって、
恐怖を味わう事になる。

何か肩書きが有ると格好良い気がするけど、逆に肩書きに負けて地味な奴もいる

違う人のも沢山読んでる為、影響を多々受けてるかもしれません…。
オリジナリティが無いんです…。
すいません…。

『逃げたからそれを追った。そこに逃げる奴が居たから』って言ったら少し格好

ウチのサブタイトル大半『？』が付いてる気がする。
気のせいか？

『逃げたからそれを追った。そこに逃げる奴が居たから』って言ったら少し格好

「で、話って何話せば良いんだよ？」

現在、屯所にいる銀時と神楽。
神楽は退屈そうに欠伸をする。

「何で彼処に居た」

土方が壁にもたれかかりながら瞳に銀時を映す。

「彼処ってなぁ…」

ポリポリ頭を掻いて、

「気まぐれ？」

笑った。
神楽は退屈そうに懐から最後の酢昆布を取り出して食す。

「気まぐれじゃねぇだろ！？ちゃんと答えろ！」

ドンッと机を叩く土方を一瞥した総悟は銀時を見つめて言う。

「旦那ァ、あんた達がちゃんと言ってくんなきゃコッチも旦那を捕まえなきゃいけねぇんですゼェ？」

「何でだよ？だいたいあのガキが何だよ？ただ夜兎っつう位だろ」

「夜兎…戦闘民族か…」

土方は酢昆布を口に頬張る神楽を見て溜息を吐いた。

「何ジロジロ見るアル。警察呼ぶアルよ？」

「残念ながらァ俺達が警察ですぜェ？」

「フゥッ…江戸の未来が心配アルな」

「不法入国者が良く言うぜェ」

「何か文句アルか？」

ガウゥと唸り声をあげて睨み合う二人。

銀時はハァと長い息を出す。

「つうかマジで何となく追って何となく話しただけだよ」

銀時の適当な答えに土方は鋭い瞳を細める。

「アイツは最近(ちまた)巷で有名な『半殺し屋』だ」

「半殺し屋…？」

眉間に皺を寄せる銀時を見て土方は頷く。

「殺しはしねぇが恐怖を体に刻みつけてくれる奴ですぜェ。殺しとどっちが良いか分かりゃしませんよォ」

総悟は視線を神楽から銀時に移して説明する。

「あんなガキがか？」

「あぁ。ちゃんと現場に毎回居て俺達が来た途端どっかに消えちまうんだ」

「しかもしっかりコッチを弄んで（もてあそんで）らァ」

キッと総悟が忌まわしそうに目を細めた。

「まぁそうゆう事だ。分かったか？」

「んで、帰って良いかぁ？」

「そうアル。私、最近始まった謎解きはブレークファーストの前を見なきゃならないアル」

フッと楽しそうに笑った神楽を総悟が睨んだ。

「馬鹿ですかィ？んな簡単に返すわきゃあねぇだろ？ちゃんと理解しろよバカヤロー」

「お前が馬鹿だろコンチキショー。私は用が有るって言ってるアル。真選組はしっかり民衆から税金絞って勝手に満足している馬鹿集団ヨ。そんな奴らが馬鹿じゃない訳が無いアル」

嘲け笑う様に上から見下す神楽。

「アァッ？」

それに総悟の堪忍袋が切れた。
元々大きくも無い堪忍袋だが、
切れたらソレはもう、危険である。

「よぉし。表に出ろチャイナ娘」

「望むところネ」

バチバチと二人の間に火花が散る。
土方は二人を気にせず銀時に言う。

「だがソイツ、何故か毎回俺達に自分から情報を与えるんだよ。去り際にな」

「情報？例えば？」

「最初らへんはくだらない情報だ。だが、最近は何か良く分かんないが…嫌な感じのモンだ」

「情報つうの全て言え」

「残念だがお前らはあくまで一般人。言えるのは此処までだ。総悟、喧嘩は止めにしろ」

手をヒラヒラ振って止めるように指示する土方を沖田は、

「テメェ何ざに指図される覚えはねェ」

目をぎらつかせた。

「馬鹿か。んなガキ相手にする方が馬鹿だ」

「知らねぇんですかィ？馬鹿って言った方が馬鹿なんですぜェ？」

「…テメェ」

怒りの矛先を土方に向けた沖田と土方の間で今度は火花が散る。

「銀ちゃん、私帰るアル。こんな所居るだけで疲れるアル」

「神楽ァ、ちょっと待て」

銀時は神楽を制して土方の肩を掴んだ。

「全部を教えろ」

「何でテメェなんかに…」

沖田に向けていた怒りが籠もった瞳を銀時に向けた土方は銀時の真面目な顔を見て、静かになる。

「分ぁったよ。全部教えてやる」

土方は怒りを鎮めると口から様々な言葉を紡ぐ。

「アイツはだな———」

「ふぅ…やっと終わったアル」

屯所から出た神楽は分かりやすく溜息を吐く。

「…」

俯いて悩んでいる銀時に神楽は頭を傾げる。

「どうしたの銀ちゃん？」

「なぁ神楽」

「何アル？」

「あのマヨラーつうかそのガキが最後に言ったのどう思う？」

「どうって…『住人をしっかり守ってくれよ。これで最後だ』だったアルか？別に…私達には関係ないと思うアルけど？」

「本当にそう思うか？」

「どうしたアル…銀ちゃん？」

「嫌な感じがする…」

神楽は更に頭を傾げる。

「良く分からないアルけど…私、酢昆布食べたいネ。金を寄越すアル」

「あのー神楽さん？今の状態で何故酢昆布ですかー？銀さんもの凄く悲しいよぉ？」

「ふっ…酢昆布に銀ちゃんも金ちゃんも関係ないアル」

「もう意味が分からないから。もう全然意味が分からないからね？」

「良いから寄越すアル！」

「ふげっ！」

銀時の腹に見事に神楽の蹴りが入る。

「銀ちゃん？」

「はっ…はい…」

「酢昆布」

神楽は倒れた銀時を見下す。

「はっ…はい…」

「返事は要らないアル。誠意を見せて欲しいネ」

銀時は冷や汗をかきながら懐から小銭を神楽に渡す。

神楽は満足そうに頷くと「コンビニ行って来るネ！」と元気な声を発して走って行った。

「いっ…行ってらっしゃーい…」

苦笑いをした銀時はぎこちなく手を振った。

これでしばらくの間神楽を見れなくなるとは――

誰も分かる筈が無かった。

『逃げたからそれを追った。そこに逃げる奴が居たから』って言ったら少し格好

感想お待ちしてまーす。

兄貴ってのは居ない人間には分からないけどねぇ、鬱陶しいんですよ。これ常識

意外と面倒だと気付いた自分。

何がって？

秘密です。

銀：だったら書くなよ糞作者が。

神楽：そうネ。何でこんなに私が食い意地がはったガキみたいアル？納得いかないネ。

新八：それ位良いじゃん、僕なんて忘れ去られてるよ？

神楽・銀時：普通だ（ネ）

新八：黙れエエエェェェェ！！

つまらなくてスイマセン。

兄貴ってのは居ない人間には分からないけどねぇ、鬱陶しいんですよ。これ常識

「あっ、近道した方が早いアル」
足を止めてポンッと手を叩く。
神楽は右に曲がる。
曲がった先には廃工場があった。
「こっから行くと早くいけるアル♪」
最近見つけた近道。
だが、まだ一回も行った事が無い。
神楽の胸が踊る。
神楽は楽しそうに歩く。
やがて――
前方に昼にあった少年が居た。
地べたに座ってスルメをくわえていた。
「お前…こんな夜中に何で…坂田銀時は…？」
眉を寄せた少年に神楽は疑問を抱く。
確かに、もう空は闇で覆われている。
だが、これ位の時間には度々外に出ている。
知らないだけなのかな？と自問自答して出てきた答えに頷いて少年の言葉に応える。

「私は酢昆布を食べたいだけアル。こっちからだとコンビニが近いネ。何か悪いカ？」

「…万屋まで送る」

「嫌ネ。半殺し屋なんかと一緒に居たらまた税金泥棒に御世話になんなきゃならないネ」

「大丈夫だ。真選組の動きはしっかり分かってる」

少年は立ち上がって神楽の横に並ぶ。

「…どうかしたアルか？」

「いや、気にするな。ただ、俺は…」

最後まで言わずに少年は顔を横に振る。

「何が――」

「逃げろ」

少年の唐突の言葉。

何時の間にか少年の手に押されて神楽は前に進む。

少年はゆっくり振り返った。

「逃げろ」

神楽に背を向けた少年は腰にかけてあったポーチの中から丸いのを

取り出して、
投げた。

ボンッ！

巨大な風が舞う。
土埃が空に散った。
思わず尻餅をつく神楽。

そこから、
影が二つ出て来たのであった。

兄貴ってのは居ない人間には分からないけどねぇ、鬱陶しいんですよ。これ常識

銀時：なぁ神楽。

神楽：何アル？

銀時：何でお前沢山出てんだよ？こんなペチャパイ娘が。

神楽：銀ちゃん、嫉妬は見苦しいアルヨ？

銀時：くそっ！作者を殺りに行ってやる。

神楽：駄目アルヨ？

銀時：何でだよ？

神楽：今作者、金が金欠で銀ちゃんを収めるカメラが見つからないアルから。

銀時：…意味が分からないんだが。

神楽：銀ちゃん、三位位に好かれてるらしいね。

銀時：何かやる気が失せるな。

神楽：じゃっ私の活躍を見るアル。

銀時：ジャンプ読もう。

神楽：私の輝きに負けたアルみたいネ。読者さん、どんどん私の活躍を見るアル！！

意志と意思の違いって結構大きいんだよな。志と思いは。（前書き）

銀時：てかオリジナルキャラのこのガキなんだよ。

新八：何か、この子が重要キャラみたいですよ？

神楽：私より活躍したら殴りに行くアル。

新八：…神楽ちゃん、この子はコレの主人公だよ？

神楽：私じゃないアルか！？

銀時：俺じゃないのかよ！？

新八：…馬鹿だろ。それ、おかしいに決まってんだろ。

意志と意思の違いって結構大きいんだよな。志と思いは。

神楽は目を疑った。
神楽の視線の先には――

「神威！！」

神威が居た。
そして、神威の後ろから神威よりも大柄な男、阿伏兎が現れた。

「なっ…何であの男も…！」

神楽は記憶を呼び起こす。
そう、吉原の時に阿伏兎は最後に新八と神楽を投げ飛ばして落ちた。

「よぉ嬢ちゃん。ちょっと用があるんだ」

阿伏兎が口を開く。

「抵抗するならそれなりの対応をとらしてもらうけど。勿論、何も言わずに来たら何もしないよ？今はだけど」

神威が薄っぺらい笑みを貼り付けながら言う。

「んっ？てか君誰？」

神威が初めて気付いたように目を見開く。

「夜兎…か…」

阿伏兎が悲しそうに口を開く。

「テメェら何かに語る名は無い。お前、早く行け」

尻餅をついた神楽を見もせず少年は傘を力強く握る。

「嫌アル！だって…」

神楽は立ち上がりながら神威を見る。

そう、彼女が長年探していた兄貴。

そんな機会をみすみす逃したいと思う筈が無い。

「邪魔なんだよ！」

少年が苦しそうに言った。

「もし、テメェが捕まったら今までの俺の行動は意味が無い。それに――」

少年は神楽を見た。

神楽は見た。

少年の悲しそうな瞳が。

「お前には、守るべきな奴も、守ってくれる奴も居るだろ？残念だが、俺には縁が無い話だ。だから、」

少年は思いっきり口を開けた。

「逃げてくれ！」

神楽は訳も分からず走った。
何がなんだか分からない。
でも、
あの少年の為にも――

「銀ちゃん！」

ヒーローを呼ばなければならない。
自分の為にも、
彼の為にも。

戦いってのは描写が難しいし、国語能力が無い奴は更に難しい。（前書き）

銀時：ねぇ神楽。

神楽：何アル？

銀時：俺の出番は何時？

新八：僕の出番も…。

神楽：知らないネ。作者に聞くヨロシ

洒流奇：そろそろかな？（新八は除く）

新八：くそオオオォォォ！！！

戦いってのは描写が難しいし、国語能力が無い奴は更に難しい。

「さて…待っててくれてありがとな」

少年は後ろを確認すると前方に集中する。

「阿伏兎、神楽を宜しく」

「こんのすっとこどっこい。さっき捕まえれば良いだろ？何でわざわざ逃がすんだよ」

阿伏兎が一本しかない腕で頭を掻く。

「んーだってビジネスとはいえ、あんな雑魚には興味無いから…そこは阿伏兎が活躍してくれるかなって」

ニコニコ笑う神威に一瞬視線を移した阿伏兎はハァと息を吐く。

「分かったよ。いきゃあい――」

少年の手から丸い物が投げ出された。

轟音が響く。

そして更に握ってる傘から銃弾の雨を降らす。

「チッ…」

少年は舌打ちをする。

ヒラリと爆弾が落ちた所に何かが落ちる。

「最後までセリフを言わせろ。すっとこどっこい」
煙が二人の威圧により消えていく。
「じゃあ行ってらっしゃーい」
空気には合わない明るい声を発する神威に少年は、
「誰も追わせねぇ！」
再度銃弾の雨を降らす。
二人は飛ぶ。
てんでバラバラな方向に。
少年は一瞬迷う。
どちらを殺るかを。
その一瞬の迷いは、
命取りだ。
少年の背後に神威が降りる。
少年は一瞬で振り返る。
だがその時には、
少年の目の前に拳があった。
「ツッ！」

少年は体を地面へ落とす。

神威の拳が宙に舞った。

神威の瞳が下――少年に向けられた時には、

もう拳が降ってくる。

横に転がる少年。

間一髪、一撃も喰らっていない。

「ふーん？結構強いんだ」

間合いを取って立ち上がった少年に神威は笑いかける。

「じゃあ、」

神威は目を開いた。

「がっかりさせないでね♪」

そして、

少年と神威の対決が本格的に始まった。

「ハァハァ…！」

走る。
神楽はただただ走る。
あの少年が稼いでくれた時間内に、
銀時を呼んで助けなきゃ。

その時神楽の足が止まった。

何で、
自分では助けなかったの？

神楽は頭を働かせる。

あの少年が言ってた言葉。
俺には縁が無い話だ。
そう、言っていた。

縁が無い？
あの少年は今戦っている。

何で？
良く分からないがあの少年は、

自分の為に戦っている。

それって、

あの少年にとって自分は守るべき存在なのだろうか？

「助けなきゃ…」

神楽は拳を握った。
さっきまで握りしめていた小銭をポケットに入れる。

「やっと追い付いたぜ、嬢ちゃん」

神楽は振り返った。
そこには阿伏兎が居た。
神楽はゆっくり振り返って阿伏兎を見据える。

「…何で私を狙うアル？」

「それに関しちゃ後で痛い程分かる。だが、」

阿伏兎は間を取ってる神楽にでも分かりやすく溜息を吐く。

「俺ぁ嫌だったんだがなぁ…。ただで少ねぇ同族が減るかもしんねぇのは」

「同族…夜兎が減る…？」

神楽は阿伏兎を睨む。

「どーゆー事アル！」

神楽の言葉が夜道に響く。
阿伏兎が溜息をまた吐く。

その時、

ザアアァァン！

近くの建物に何かがぶつかった。
建物の壁が意図も簡単に崩れる。

少しして建物から人が出て来る。
少年だった。

「！！」

驚きで体を硬直していた神楽は、

倒れた。

阿伏兎の腕が神楽の鳩尾に入っていた。

神楽の小さな体は阿伏兎の肩に乗せられる。

戦いってのは描写が難しいし、国語能力が無い奴は更に難しい。（後書き）

戦い長いなぁ……

携帯がウェブ行き過ぎで熱いな……。

誘拐ってドキドキするけど、書いてる人はハラハラするモンだ。（前書き）

銀時：そろそろって何時何だろうって思うんだが。

神楽：知らないネ。でも今は最高アルヨ！私沢山出てるネ！！

新八：希望を下さい…。

誘拐ってドキドキするけど、書いてる人はハラハラするモンだ。

「…！」

ゆっくりやって来る神威を見つめていた瞳が違う光景を映した。
阿伏兎の肩に俵担ぎをされている少女――神楽がピクリとも動かない。

「クソッ！」

少年はすぐに立ち上がって神楽を担ぐ阿伏兎に足を進める。

「んっ…って団長の獲物が何で此処に居んだぁ？」

「仕方がないじゃん。そっちに飛んだんだからさぁ♪」

阿伏兎の横に並んだ神威。
少年はキッと目を細める。

「で、どうします団長？」

「うーん、殺しちゃう」

ニッコリ笑った神威に何にも感じず、
少年はただ睨む。

「…せ」

か細い声に頭を傾げる神威。
「んっ？」
「ソイツを離せ！」
突如、少年が消える。
神威は頭を上に向けた。
「馬鹿なのか」
阿伏兎が鼻で笑う。
「上じゃあ逃げれねぇよ」
刹那、神威の姿も消える。
月に照らされる二人の姿。
チャイナ服を纏った同族は、
戦う。
「逃げ場がねぇ？」
少年は笑った。
「作れば良いだろ！」

少年はポーチに手を突っ込んだ。
さっきのとは比べ物にならない程小さなスーパーボールの様な物が
少年の手から零れた。
数秒後、蹴りを入れようとした神威の腹に当たる。

カチッ

小さな音が神威の腹になった。

ボンッ

音が響いた次の瞬間、

神威の体が勢いよく落ちる。

少年の体は爆風で宙に舞う。

地面に落ちてきた神威を見た阿伏兎は溜息を吐く。

神威はゆらりと体を起こした。

「阿伏兎…」

「何だぁ？」

「ちょっと待ってて♪」

阿伏兎は当たり前の様に呆れた様に頷く。

再度神威は空に向かった。

まだ宙に舞っていた少年の腹に――
蹴りが入った。
「グハッ！」
少年の口から鮮血が飛んだ。
地面に勢いよく当たる。
ミシミシミシッ
少年の体に嫌な音が響いた。
スタッと落ちてきた神威は少年に近付く。
「なぁ…」
少年は赤い模様で彩られている口を動かす。
「何？」
楽しそうに笑った神威を見て、
少年は立ち上がった。
「俺がお前らに付いていく、だから――」
少年は前に踏み出す。
切れている所から血が僅かに飛び出る。
「神楽を此処に置いていってくれ」
神威は目を見開く。

「何で…こんな雑魚を助けようと思うの？」

「雑魚…？ハハハッ…」

力無く笑った少年の顔は月の光に照らされる。
青白い顔、切れてる唇を動かす。

「強いよ…ソイツは…少なくとも俺よりは…」

「ふうん？」

「俺はお前みたいに夜兎の血に従う訳でも無い、そこのオッサン…
阿伏兎みたいに血を愛でる訳でも無い…そこで担がれている神楽みたいに血と戦う訳でも無い…」

「じゃあ君はどう思うの？自分に流れている血を」

「付属品」

少年はそう笑った。

「…良く分からないや」

神威は手を広げて頭を振る。

「分からなくても構わない。でも、」

少年は更に神威との距離を自ら縮める。

「神楽(ソイツ)だけは止めてくれ」
最早、動けない体に鞭を打って神威の目の前に立った。
「ふうん？良いよ。その話」
神威は笑った。
「オイッ団長！」
阿伏兎の声が響く。
少年の顔が一瞬綻んだ。
そして、すぐに少年の腹に拳が入った。
「！？」
「君も一緒に連れてくよ」
少年の小さな体は神威の腕の中に入る。
「帰ろ、阿伏兎♪」
ニッコリ笑う上司を見た阿伏兎は、
「疲れた…」
どデカい溜息を吐く。
「…せ」

神威の肩に乗っている少年がピクリと動く。

「何？まだ起きてるの？」

目を大きく開けた神威に少年はポツリと呟く。

「返せ…」

「行くぜ団長」

「ハイハーイ」

担がれた二人の未来は――

誰にも分からない。

誘拐ってドキドキするけど、書いてる人はハラハラするモンだ。（後書き）

少年の台詞、
アレ、
ただ言わせたかっただけです。
ハイ、
スイマセン。

待ってる奴は憂鬱なもんだけど、待たせてる奴はもう心臓バクバクだよ。（前書

銀時：来たよ、主人公の輝き。

神楽：ちっちゃい男アル。私なんか銀ちゃんの何倍出てると思うアル？

新八：どっちが小さいんだか…ねぇ作者さん。

洒流奇：何？

新八：僕は何時出ますか？

洒流奇：ずっと先かな？

新八：…はぁ。

洒流奇：大丈夫、君にはお通ちゃんが居るだろ？

新八：五月蝿い！お通ちゃんは神なんだ！テメェが呼んでも良い奴じゃない！

洒流奇：このヲタクが。

新八：お前の方が学校と家族にヲタクって言われてんだろ！そして中二病患者が！

洒流奇：黙れー！！！

待ってる奴は憂鬱なもんだけど、待たせてる奴はもう心臓バクバクだよ。

「…おかしい」

銀時は呟く。

時計の針はもう夜中の十二時を指していた。

「何で神楽が帰って来ない…？」

そう、幾ら遅くだってコンビニを寄った位で五時間は有り得ない。

銀時は電話をかけた。

「はい、此方真選組です」

地味そうな声が銀時の耳に届いた。

「その声は…山崎か…」

銀時の言葉に相手、山崎退は反応した。

「あれっ、旦那じゃないですか？どうかしたんですかこんな夜分に」

「いや…神楽そっちに居ないか？」

「いや…知りませんけど…何かあったんですか？」

「別に何もねぇよ。つうか何でお前こんな夜遅くに起きてんの？何、

とうとうマヨラーに反抗？」

「違いますよ旦那。事件ですよ事件」

「事件…？」

銀時は自然と眉の間の距離を短くさせ、
受話器を力強く握った。

「えぇ。何か廃工場付近で爆発の音を聞いたーって事で。何かさっきの情報ですけど、チャイナ服の血まみれの少年と少女が運ばれているのを見たってのも。…もしかして旦那、今思ったんですけどその少女って――」

「サンキューなジミー…今からそっちに向かう」

「えっ…ちょっ旦那！？」

ブチッと電話を切った銀時は腰に有る物を確認する。
『洞爺湖』と書かれた木刀は万屋を照らしていた光によって煌めく。
銀時は走る。
そして、叫んだ。

「神楽ァ！」

攫われて、そこに片目を包帯で巻いた男が居たら恐怖だよね。（前書き）

今回スッゴく長いです！

そしてずっと前の話だけど、銀ちゃん誕生日オメです。

銀時：何で忘れてたんだ？

洒流奇：だって予約掲載で忙しかったから完璧に忘れてたんだもん。てかだったら自分で言いなよ。

銀時：はっ？自分で言ったら最低じゃんか。銀さんそーゆーの分かってんだから。

神楽：まるで作者みたいアルな。

新八：確かに。自分で言えずに終わる作者みたいです。

洒流奇：何言ってんだ！私は銀ちゃんと似てない！つか失礼！

銀時：そりゃこっちの台詞だ！こんな腐ったヲタクと同じにすんな！

神楽：…似たものどーしアル。

攫われて、そこに片目を包帯で巻いた男が居たら恐怖だよね。

何でこんなに…体が重いんだろう？
お腹がズキズキするヨ。
何か体がブラブラ宙に浮いてる感覚。
バタッ
何か音がしたアル。
地面に落とされたアルか？
振動が凄いネ。
でも、どうでもいいアル。
疲れたアル。
このまま――

「…せ」

何の声？
あっ温かい。
誰か私を温めてくれてるアルか？
パピー？
銀ちゃん？
新八？
姉御？
それとも――
お兄ちゃん？

「神楽を…返せ…！」

パッと神楽の目が覚める。
さっきまで靄（もや）がかかったように動かない頭が動き始める。

最初に視界に入ったのは誰かの背中だった。
神楽は頭を傾げる。

「神楽を…地球に返せ！」

神楽は瞬きをした。
少年だった。
男物のチャイナ服が所々解れてたり（ほつれてたり）切れていた。
切れている所からは白い肌と生々しい赤い傷が覗いていた。

「お…前…大丈夫アルか…？」

神楽はあまりの光景に頭が回らなくなる。
少年は気付いたようにコッチを見て顔を明るくさせた。

「大丈夫か？怪我は！？」

「えっ…お前の方が酷いじゃないか…お前の方が大丈夫アルか…？」

此方に振り返って顔を接近させた少年に気圧される神楽。
そこで気付く。
少年の手に鎖が巻き付けられている事に。
ジャラッと自分の手にもあった事に神楽は驚愕する。

「俺は平気だから…お前こそ大丈夫か？」

少年は自分の怪我には目もくれずただひたすら神楽の体調を心配する。
だが、此方を向いた少年の体はボロボロだった。
背中だけでは無かった。

腕にも、足にも、腹にも。
服も、体も、
ボロボロだった。

「だっ大丈夫アル…」

神楽は目が合わせられない。
こんなに頑張った少年とは違って無傷に近い自分の体。
自分と同年代位の少年は自分を心配する。
神楽の心が崩れそうだった。

「良かった…！」

少年は嬉しそうに笑った。
神楽はぎこちなく笑った。

「起きたならァ、こっち来い」

二人に氷よりも冷たい――
言葉がかかる。
二人の動きが止まる。
数秒後、少年がゆっくり振り返った。
片目を包帯で隠した男――高杉晋介が居た。

「なんで俺らがテメェん所に行かなきゃなんねぇんだよ」

少年が必死に言った言葉に高杉は嘲る様に笑って見下した。

「良いから来いよォ。それともそっちのガキをどうにかしたら来んのか？」

高杉の目が神楽を捉えた。
神楽の息が止まる。
神楽は辺りを見回した。
何処――？
神楽は見た事も無い部屋に更に思考が絡まる。
向こうに机と椅子が有る。
その机には料理が豊富に乗っている。
椅子には三人座っていた。
高杉と神威と阿伏兎だ。
神威は此方に興味が無いようにただ食べ物を口に含んでいた。
阿伏兎は呆れたように神威を見る。
そして、高杉は――こっちを見ていた。

「…！クソッ…」

少年が悔しそうに言葉を吐くとゆらりと立ち上がった。
少年の息が見るからに上がっていく。

「…オイッ！お前！」

「お前はそこに居ろ」

少年はゆっくり歩み始めた。
神楽は恐怖で動かない足を睨む。
足はただ――震えるだけだった。
神楽は視線を少年に移した。
倒れそうな程不安定な足取り。
はっきり言って動かせるような体では無い。
だが、少年は神楽の為に――歩く。

「ハァ…ハァ…何だ…よ…？」

高杉の前に立った少年は足を広げて体制が崩れないようにした。
神威がチラリと視線を少年に向けたがすぐに食事に集中した。

「オメェは誰だ？」

高杉の問いに少年は力無く笑って、

「力無き男っつう事で」

弱々しく応えた。
神楽は立ち上がって少年の元に確かな足取りで向かう。

「何だよ…？ハァ…来んなつったろ？」

少年は神楽を見たが、
焦点があってない。
焦点があったのなら神楽と目が合う筈なのに少年は合わせられない。

「馬鹿ダロ！こんな奴にわざわざ近付いて！男とか関係なく馬鹿ダロ！」

神楽は少年の肩を叩く。
大して強くない力。
だが、少年は崩れた。

「あれっ…？神楽、今ソイツを男って言った？」

神威が口を手で拭いて神楽を見る。
神楽は神威の視線から逃れず睨む。
「言ったアル。それにコイツ自身言ってたロ？男って」
神威はキョトンとした顔で神楽を見てからクスクス笑う。
目の前に居る高杉もクツクツ笑う。
「何だヨ！ちゃんと言えヨ！」
高杉がニヤリと口だけを動かす。
「そいつァ…女だよ。見りゃあ分かるだろ？」
神楽は「えっ？」と言って崩れている少年を見た。
座っている少年は俯いて表情が伺えられない。
「幾ら男物の服を着てるからって…神楽…クスッ…馬鹿？」
最早笑いすぎて目に涙を貯めている神威に神楽はカチンと来た。
「ウッサイネ！だったらテメェらレディに何してんだヨ！コンチキショー！」
「別に君達は実験体だから関係ないよ？それこそ、男女関係なく」
「実験体っ！？」
神楽が高杉を見る。

「ソォ言う事だよ。分かったか？」

「んで、」と言って高杉は少年の腕を掴んで無理矢理立たせる。

「テメェの名前は何だ？」

「…実験体に名前は要らねぇだろ」

少年――否、少女は高杉と目を合わす力も無いのかそれとも意識的にか分からないが、机に片方の手を置いて支えて、高杉を見ない。

「良いから言え。じゃねぇと…」

高杉の足が神楽の足を襲う。
高杉の回し蹴りによって神楽の体がよろめく。
そして、倒れた神楽の首筋に――
刃が。
何時の間にか抜いていた刃は切れ味を証明するが如く煌めいた。
神楽は目を見開きながら唾を呑む。
たったそれだけの動作で刀に当たったのか首筋に赤い液体が流れた。

「！？」

「で、どうするんだ？」

少女は神楽を見る。
震えてはいないが瞳には恐怖を映していた。

「…らい」

「あっ？」

高杉の睨みに少女は机に置いている手を震わせた。

「風雷（ふうらい）」

「そうか…」

高杉はアッサリ神楽から刀を離し、少女――風雷から腕を離す。

「…で俺に何させるきだ？実験体ってよぉ？」

「風雷、テメェだけじゃねぇって言ってんだろ？そこのガキ――神楽もだ」

「認めねぇ…。コイツだけは駄目だ…！」

風雷の睨みに今まで見守っていた阿伏兎が溜息を吐く。

神楽はただ風雷の横顔を見ていた。

「まぁ…そりぁテメェの活躍しだいだ。テメェにしてもらう事は――」

高杉が言い終わってない時、風雷は崩れた。

高杉は死んじまったのか？と瞳に映して下を見る。

風雷は死んでいない。

ただ風雷は――神楽の華奢な腹に拳を決めていた。

神楽は何があったか分からないように目を開けて、

意識が途絶えた。

風雷は倒れた神楽の体をゆっくり地面に寝かせた。

「…何のつもりだ？」

高杉の見下した視線に風雷は気にしない様子で口だけを上下に動かした。

「ただ、コイツには…何も苦しんで欲しくねぇだけだ」

風雷はそう言うと体を無理矢理起こす。

「で、俺は何をするんだ？」

「簡単な事だァ。ただ、」

次の高杉の言葉は酷く辛いモノだった。

だが、風雷はふうんと鼻で笑う。

「それ位か」と小さく呟いて。

「分かったかァ？テメェが死んだらそのガキだからなァ？」

高杉は落ち着いた様子で寝ている神楽を一瞬見て、風雷を睨んだ。

「死ぬ筈がねぇだろ？それ位で」

話が終わると風雷は机に座る。

否、座るしか彼女の体を支える事が出来ないのだ。

そこで風雷は視線を感じた。

誰だろうと思い自分を見ている人間を見た。

神威だった。

「…何だ？」

神威は退屈そうな頬杖をついて風雷を見てから視線を落とした。
風雷は下を見る。
別に自分にとっておかしな物は無い。
なら、
コイツは何を見ている？
神威は突如立ち上がるとツカツカ足音をたてて風雷に近付く。
風雷には何をするか分からない。
思わず身構えようとするが、
そんな体力が残っている筈がない。
神威は目の前に来ると風雷の腰周りに手を回した。

「何だよ」

風雷は力無き腕を無理矢理動かして神威の胸板を押した。

「何が入ってるのかなぁって」

そう言った神威の手には、風雷が腰に付けていた物、ポーチが握られていた。

「！」

風雷は顔を歪ませ、神威の手の物を取ろうと手を動かす。
だが、神威はそれをアッサリ避けて風雷の横に並ぶと中身を全て神威によって食された何も無い机にぶちまけた。中には沢山の爆弾などがあったが他にも葉っぱが入った小瓶がコトリと音をたてて落ちる。

「…何これ？」

神威が呆気に取られたように小瓶を一つ親指と人差し指で支えた。

「…別に何でも良いだろ」

風雷の言葉に神威は足をあげて――
寝ている神楽の顔に向けた。
そして、
下ろした。

「止めろ！」

風雷の言葉にすんでのところで神威が足を止めた。
神威は笑顔で頭を傾げる。
どうする？とでも言いそうな素振りに風雷は息を落ち着かせながら
途切れ途切れに言う。

「く…すり…だよ…」

「薬？」

神威は目を見開いて頭を傾げる。
夜兎は治癒力が他の奴らとは違ってすぐに治る。
どれだけ治癒力が凄いかと言うと――銃で撃たれた場所が3日で治
ってしまう位。
そんな夜兎の一人が薬を持つ事に疑問を感じない訳が無い。

「何か…悪いかよ…」

風雷は神威に飛びかかってポーチを取る。
「残念だけど武器は回収するよ」
神威の言葉に風雷は頷く。
「そういや…俺の傘は…？」
風雷の言葉に神威は頭を傾げる。
そこで阿伏兎が口を開いた。
「団長が管理してるよすっとこどっこい」
「そうだっけな～？」
神威は変わらぬスマイルで風雷に話す。
「もう…牢屋でも構わないから…休憩させてくれ…」
高杉は頷いて神威に目で指示する。
「はいはい」
神威は頷く。
風雷は無理矢理体を机からおろして、
しゃがむ。
そして寝ている神楽の背中と足に手を回した。
そして、
持ち上げた。
風雷の閉じかけていた傷口がミシッと音をたてて開く。
服に更に血を染み込ませる。

思わず立ち眩みをする風雷だが、ちゃんと立っていた。
意識があるだけで素晴らしい状態なのに。

「…神楽(ソレ)持とっか？」

神威の形だけの心遣いに風雷は顔を横に振って、

「テメェなんかに持たさしてたまるか」

毒づいた。
神威はじゃあっと小さく言うと、
風雷の腹に軽く力を入れた。

「…つっ」

腹部に食い込む拳によって風雷の体はよろける。
そして神楽を起こさないように、
衝撃を与えないように倒れた。
肩で呼吸をする風雷の手から神楽を乱暴に神威ははがすと、立ち上がった阿伏兎に投げた。

「はっ…？」

予想していなかった阿伏兎は驚きながらも右腕だけで受け取った。
風雷はケホッケホッと咳をする。
口を覆った手の平にはべったり赤いモノが付いていた。

「…何するんだよ」

風雷は体を震える足で起こすと、神威を瞳に映す。

表情が分からない――感情が分からない――何が何だか分からない
笑みを浮かべる神威は、
「無理してるからさぁ。こっちが困るんだよね？」
溜息を零す。
「だいだい君全然寝てないじゃん。それじゃ明日から始められないんだよね？じゃなきゃ俺早く銀髪のお侍さんの所に遊びに行けないんだ」
「…知らねぇよゲホッゲホッ」
ハァハァと荒い息の風雷は何故か意識を保っている。
しかも、神威達と会った時からずっとだ。
はっきり言って普通の人間では一発でもお寝んね位のモノだ。
だが風雷は――二発攻撃を何のガードも無く受け、
意識を繋いでいる。
此処に来るまでずっと「神楽を地球に返せ」というワードを口にしながら。
奇跡と言っても過言では無い。
「まぁ良いから」
そう言った神威は素早く行動に移した。
風雷に向き合ってしゃがみ、風雷のお腹に肩を当てて、
立つ。
風雷にはもう抵抗する力がある訳無いのでされるがままだ。
「くっ…下ろせ…」

神威は風雷の言葉に反応する事無く高杉に気さくに「じゃあねー」と言って手を振る。
高杉はソレに応えず懐から煙管を取り出し口にくわえた。
神威達は部屋から出て行ったのであった。

攫われて、そこに片目を包帯で巻いた男が居たら恐怖だよね。（後書き）

さて、オリキャラの風雷、おはよー！

風雷：五月蝿いんだが。

銀時：こんなの普通だよ。こんなんで苦しんでたら後でもっと辛いぞ？

風雷：マジカ…

誘拐されたらどう持たれるか結構気になる。（前書き）

では、オリキャラ風雷の簡単自己紹介をします！

風雷：…。

神楽：風雷は誕生日何時アル？

風雷：４月２日だ。

神楽：おおっ！早生まれ！

風雷：…うん。

風雷は何歳？

風雷：１４か１５かな？

神楽：何であやふやアル？

風雷：一時期俺は…

洒流奇：ハーイ、ドクターストップならぬ作者ストップ！それは未来、コレに書くから今は何も言わなーい。

風雷：悪いな？

神楽：平気アル！

洒流奇：じゃあ次。風雷は何座？

風雷：夜兎にもそーゆーの有るのか？

神楽：因みに私は餃子アル！

洒流奇：ハイ、黙るー。

風雷：大体、夜兎と人間の差は大きいぞ？構造的にも――

洒流奇：ハイ、作者ストップ！！それを言うのは未来！

風雷：…。

神楽：んーじゃあ風雷ってどんな男がタイプアル？

風雷：…んー。そーゆーの考えて無かったな…。

洒流奇：どーゆーの！？どーゆーの！？

風雷：とりあえずドンと構えている男が良いかな…？

洒流奇：ドン…？

風雷：うん。何でもかんでも考えて速やかに対処する奴。まぁ、出来ればだけど強いと尚嬉しいな。

神楽：風雷、男が出来るといいアルな！

洒流奇：まぁ、でもこんな男女を――

風雷：うん、ありがとう。

洒流奇：ギャアアアアァァァ！

風雷：ただ一発殴っただけなのに、五月蝿い。

神楽：同意見アル。

洒流奇：今まで……応援ありがとう…。

―遺書―

長い文を読んで下さり、ありがとうございます！そしてお気に入り登録ありがとう！皆の応援を背に安心して逝けます！まさかガールズトークで死ぬとは…ありがとう（？）！

洒流奇

誘拐されたらどう持たれるか結構気になる。

風雷は周りを見る。
機械的な薄暗い廊下には誰も居ない。

「下ろせ」

「ヤダ」

この会話がずっと続く。
阿伏兎は溜息をついて「すっとこどっこい」と小さく呟く。

「…ん」

唐突に聞こえた声に阿伏兎は頭を傾げる。
前のペアは同じ事を繰り返している。
じゃあこの声は誰だよ…と思考をした時再度声がする。

「お兄ちゃん…」

この嬢ちゃんかと阿伏兎は頭を横に捻った。
死体の様に動かない神楽の体は少し暑い。
そんな神楽はポツリと小さく何回も同じ単語を発する。

「お兄ちゃん…」

阿伏兎はフゥと溜息を吐いて、
「嬢ちゃんが求める団長はもぉ居ねえよ」
と呟いた。
「何か言った阿伏兎？」
前に居た神威が振り返って頭を傾げている。
阿伏兎は「何でもねぇよすっとこどっこい」と呟いてフッと笑った。
神威は「ふうん…？」と頭を傾げて前を向く。
「下ろせっつてんだろーが！」
風雷の怒声が響いた時には――
神威は崩れて無様に座っていた。
「団長っ！？」
阿伏兎は神威に駆け寄る。
神威が崩れた事によって風雷は静かに立ち上がった。
「先…行くぞ」
壁にもたれかかりながら風雷は先に進む。
「団長…さっき…」
駆け寄った阿伏兎に神威は「大丈夫」と言って立ち上がった。
「…団長？」

「何、阿伏兎？」
「いっ…いや…」
阿伏兎の心配そうな顔は苦笑に変わる。
神威は風雷の元に歩む。
風雷の歩く速さは蝸牛並だった。
それでも懸命に歩いていた。
彼女の通った後には、壁には僅かに赤い模様が出来ていた。
「…何だよ？」
隣に並んだ神威を風雷は一瞥する。
神威は風雷の震える足と弱々しい背中の手を回した。
そして、
持ち上げた。
「へっ…？」
風雷の持ち上げられた後の第一声は酷く呆けた声だった。
風雷はゆらゆら揺れる自分の腕、何も支えずただ揺れる足――間近に見える神威の顔に頭を捻る。
今自分はどのように持ち上げられているのかと――
さっきのは俵担ぎとかだった。
では今は何だ？
確か…これ…
お姫様だっこ？

お姫様？この俺が？

風雷は神威に見えないように顔を俯かせる。

といってもどう足掻いても頭上にいる神威は風雷の姿が見えるが。

「下ろせ…」

風雷は人差し指と中指をまっすぐにさせ、

神威に刺す。

だが、

「つっ」

その前神威の背中に回っていた手が風雷の腕を掴んだ。

そして、握られた。

腕から痛みが全身に広がる。

只でさえあまり無い体力が削られる。

「次余計な事したら…」

神威の笑顔が風雷に向いた。

「殺しちゃうぞ♪」

風雷の体に寒気が走る。

風雷は「せめて…」と口を動かした。

「何か文句があるのかいすっとこどっこい」

横から阿伏兎が風雷を見る。
いや、文句は有りまくりっすけど…という言葉を呑み込んだ。
阿伏兎の肩に担がれている神楽。
脅迫か…と笑った。

欲しかった情報を貰うと何か苛つくのが普通だ。（前書き）

風雷、どうやって神威を地面に寝かしたんだー？

風雷：それは簡単だよ。力を使ってたりすると必ずキラーポイントが出来る。まぁ一瞬だけだけど。それを押しただけ。てか他にも色々な血流とかで……

…難しいから黙って下さい。

欲しかった情報を貰うと何か苛つくのが普通だ。

「…山崎」

現場に辿り着いた銀時と山崎。
真っ暗な闇の中、真選組の服は溶け込む。
溶け込めていない野次達は派手な色で自らを彩っていた。

「旦那…どうしました？」

案内した山崎が苦しそうに聞いた。

「情報をくれ」

銀時の低い声に山崎は躊躇いもせずに情報を与える。

「さっきの目撃情報ですけど…四人ともチャイナ服を着ていたそうです。攫った男達の特徴は…一人は大柄、もう一人は…攫われた女の子と同じ髪の色で、おさげだそうです。攫われ女の子は…旦那の知ってるとおりです。もう一人は…茶髪の天パの少年…」

「なぁ…天パの少年っつうのは…」

「旦那、副長達から聞いた人が居たでしょ？ソイツじゃなかったかとコッチは睨んでます。で、誰のか分からない小銭が少し」

山崎が指を指した方には握る場所が小銭がポツンと置いてあった。

銀時は多分神楽が持っていたモノだと伝える。

「じゃあ…茶髪は…」

「そのガキなんじゃねぇの？」

銀時はそう言うと踵を返した。

「あれっ…旦那…？」

「俺は帰るわ。じゃあなジミー…。サンキューな」

銀時は足早に家に向かう。

さっきの山崎の情報の攫った相手…

同じ髪の色でおさげ？

そんな奴一人しか居ねぇじゃねぇか。

「神威…！」

怒りが籠もった言葉をゆっくり銀時は吐いた。

欲しかった情報を貰うと何か苛つくのが普通だ。（後書き）

銀時：俺登場！

新八：…僕は？

神楽：忘れられているアル。

新八：もう、叫べない…。

神楽：仕方が無いネ。

銀時：そういや、オリキャラは？

神楽：作者がコレで先にあったらおかしいーとか云々で連れ去ったアル。

銀時：会ってみたかったのによー。

神楽：ドンマイアル。

銀時：何時会うんだーろ。

神楽：精々待ち続けるが良いネ。

女の子を閉じ込めるんならちゃんとした部屋にしろ。（前書き）

銀時：何で高杉と神威の方が俺より出演してんだ！！

新八：同意見ですね。何でツッコミ無しで話を進めてんですか！

銀時：本編ではアイツ等より１００倍位出演してっつうの！

新八：そうです！なのに何でコレでは僕等全然出てないんですか！

神楽：負け犬の遠吠えアルな。

女の子を閉じ込めるんならちゃんとした部屋にしろ。

ドサッと乱暴に落とされた神楽と風雷。
風雷は周りを見渡した。
ちゃんとした部屋。
寝床もあって奥に扉が二つある。
おそらく、トイレと風呂だ。
風雷は神威を睨む。

「何で…」

牢屋じゃねぇんだと言おうとした時、神威が答えを言った。

「君達が夜兎だから」

逃げられねぇようにっつう事かと風雷は理解する。

「なぁ…頼むから傘だけは返してくれ」

風雷は頭を下げた。
扉を開けた神威が「何で？」と聞いた。

「…その傘は親父のだから」

神威はふうん？と頭を傾げて、

「気がむいたらねぇ」

と言って鍵を閉めた。

「親父…母さん…」

風雷が呟いた言葉は意識を取り戻した神楽の耳に届いた。

「ねぇ？」

部屋に戻って来た神威が高杉の向かいの席に座って話しかける。
高杉は瞳を神威に向けてから「なんだ」と答えた。

「死体屋って言うの聞いた事ある？」

頬杖をする神威は明後日の方向を見ながら聞いた。

「あぁ…あるさ」

ふぅと唇からキセルを離して白い息を吐いた高杉はそのまま口を動かす。

「ソイツァ確か、殺し屋とは違って集団殺人をして、絶対取り逃がさず、それを見た者、見てなくても近くに居た奴らも殺すっつう残虐的な奴らだろ？」

「それそれ。名前しってる？」

「…いいや、知らねぇ」

「全てを蹴散らす雷(いかずち)を持つ男、『神鳴』」

阿伏兎が遅れて部屋に入ってくる。

「風を自由に舞わせ、死体を靡かせる女、『風紀』の二人で行われているんだ」

「良く知ってんなァ」

高杉が神威に顔を向けた。

神威はニコッと笑った。

「だって夜兎の中で異端な二人だもん。スッゴい強いらしかったから戦いたかったんだよネェ」

「“異端”？」

高杉の問いに阿伏兎が答える。

「あぁ。ソイツらは俺達と同じ武器は使わないんだ。夜兎族は普通傘しか使わねぇ。だけど、『神鳴』は刀を使って『風紀』は…」

阿伏兎が何だっけなぁと頭を悩ましていた時、神威が口を開く。

「血」

「血？」

高杉が眉間に皺を寄せる。

「うん」

神威は当たり前のように頷いた。

「どうやって使ったか分かんないけど」

「っで…いきなり何だよ。ソイツらの話題を出して」

「夜兎族はソイツらを嫌ったんだよ。だから夜兎族の大人達は『雷』と『風』って名前は子供につけないって決めたらしいんだよねぇ」

「…成る程」

高杉は理解したように頷いた。

「ソイツは良い話だなぁ」

高杉の言葉に阿伏兎は疲れたように溜息を零し、神威は何時も通り笑った。

女の涙にときめくのは男だけじゃない。（前書き）

銀時：つうか作者。

洒流奇：うん？

銀時：幾ら２０話位貯めてるからってよぉ…

洒流奇：貯めてるからってよぉ？

銀時：暇すぎだろ。

洒流奇：うんうん。夜中に予約掲載して満足感にあふれながら次の日も授業寝ちゃうんだよ…へっ！？何言ってんだ！俺は何時でも忙しい！

銀時：だったらこうやって前書きに俺ら出す余裕無いだろ。毎度毎度…。いきなり始まったと思ったら永遠と続いてるし…。

洒流奇：サービスだよサービス！

新八：だったら僕を出すサービスして下さい。

洒流奇：…新八。

新八：何ですか？

洒流奇：チミチミした男は嫌われるよ？

新八：五月蝿エエエェェェェ！！

女の涙にときめくのは男だけじゃない。

「…何で私を気絶させたネ？」

神楽は風雷の肩を勢いよく掴んだ。
風雷は一瞬顔を痛みでしかめさせてからニッコリ笑った。

「君には、そのままで居てほしいだけ」

「…？」

予想外の解答に神楽は頭を捻らせる。
風雷はクスッと笑った。
そして神楽の頭を撫でる。

「なっ…私はガキじゃないネ！」

「ん…懐かしい」

風雷の顔が綻んだ。
そして周りを見回してから頷く。
神楽はんっ？と頭を傾げた。

「監視カメラと盗聴器は無いから平気か」

「…何がネ？」

「俺の本当の名は――」

「名は？」

いきなりの神威の声に風雷は体を震わせてから周りを見た。
神楽もキョロキョロ見回す。

「此処だよ、此処」

声がした方には――窓があった。
そこから見ていた。

「…」

「まさか偽名だとはね。で、名前は？」

「神鳴」

「はい、ダウト」

神威の微笑みに神楽が怒鳴る。

「何でお前なんかが分かるネ！本名に決まってるネ！」

「だって神鳴なんて、死体屋の一人の名だよ？おかしいだろ？」

神威の宥めるような口調に神楽は腹を立てながらも神威の発したワードに頭を傾げる。

「…死体屋？」

「それは後で風雷に聞いてね。あっ偽名なんだっけ？」

「…」

神威は俯いた風雷の顔を見えないのを残念そうに顔をつまらなそうにしてから、で？と聞いた。

「…雨砂（あめさ）」

「それは本名？」

神威の言葉に風雷――雨砂は頷いた。

「分かった。じゃあねー」

カーテンがしまって足音が遠くに行った。

「私は…」

雨砂を見た神楽は時が止まった感覚がした。
雨砂は笑っていた。
清々しい笑顔で。
逞しい、神楽は惚れ惚れした。
さっきの神威達の言葉を思い出す。
こんなに格好良いのが…女の子？
こんなに頑張って私を守る子が…女の子？
確かに、顔立ちは可愛らしいので女の子に見える。
ただ、

それにしては格好良すぎる気がした。
すこし、羨ましいと思った。

「…雨砂」

「風雷って読んでくれ」

「…？」

「この世界には俺の本名を知ってる奴なんか居ねぇよ。だから、風雷って言ってくれ」

神楽は頭を傾げる。
つまり、雨砂という名も――

「そうだよ。偽名」

雨砂、いや、風雷は応えた。

「何で…名前を…？」

「沢山有るからだよ」

此方を向いた悲しそうな声と笑顔に神楽はどう対応すれば良いか焦る。
それを理解した風雷は神楽の頬をさすって「落ち着いて」と優しく言った。

「…神楽、君は何かされたらすぐに俺に言うんだよ？絶対にさせないように尽力は尽くすけど…力不足かもしんないから」

昔のお兄ちゃんのような温かさに神楽は瞳に涙が溜まっていく。

「うっうっ…」

「ほらほら…落ち着いて？大丈夫だから。怖い思いはさせないから」

神楽を抱き締める風雷の優しさに神楽は抑えていたモノを出した。数分後、落ち着き始めた神楽は赤くなった瞳を袖で拭きながら風雷に震える声で聞いた。

「なっ…何で…私を頼ってくれないネ…わっ…私確かに弱いネ。でも、私っ私だって…やれば出来るネ」

風雷は神楽の問いに応えず、「風呂で落ち着いてきな」と促されるまま、風呂に押し込まれた。

「…風雷？」

「何だ？」

「風雷は…何時入るネ？」

「んー？」と閉まった扉越しから聞こえた。

「後で。神楽、俺が入ってる時は風呂の扉の前、脱衣場ん所に居ろよ？何かあったら嫌だからな」

「だったら…」と神楽の明るい声を聞いた風雷は突如開いた扉に入

れられた。

「一緒に風呂入ればＯＫアルヨ！」

勢いで入れられた風雷は倒れていたので、頭上にある輝かしい笑顔に目を細めた。

「俺には…眩しいや…」

「何か言ったアルか？」

「良いや、つうか恥ずかしいから良いよ。俺は――」

とラスト数文字という所で「良いから良いから！」と神楽の手が服に当たる。

「いやいやいやいや！平気だから！大丈夫だから！」

風雷の抵抗は虚しくも――

神楽に適わなかった。

「んー…」

神威は部屋の前で話を聞いていた。

「沢山名前が有るかぁ…」

神威は頭を可愛らしく傾げて、笑った。

「面白くなりそうだ」

大層な話は無いって言ってる奴いるけど、本当に情報が欲しい奴は気にしてられ

洒流奇：銀ちゃーん。

銀時：お前にちゃん付けされるのキモイ。

洒流奇：銀さん。

銀時：何だよ？何かあったのか？何かくれりのか？

洒流奇：未来（第二章）の敵役の人さぁ、ただの天人が良いかな？
夜兎が良いかな？

銀時：興味ないが…。第二章って俺出るのか？

洒流奇：ううん。神威達が活躍。

銀時：じゃあ興味ねぇよ！つか主役はオ・レ！

洒流奇：主役は風雷だよ？まぁ良いじゃん。

銀時：良くねぇよ！

新八：僕の前で言えますか？

銀時：…新八。

新八：銀さんは今回も出れるじゃないですか。僕は出れないんですよ？

銀時：お前にも未来は有るって。

という事で完璧にスッゴく先ですけど、第二章の敵、ただ（何かしら凄い）の天人か、夜兎にしたいんですが、感想お願いします！

（まだ第一章書き終わって無いけど）

大層な話は無いって言ってる奴いるけど、本当に情報が欲しい奴は気にしてられ

「なぁ…ヅラ」

「ヅラじゃない桂だ」

長髪の男、桂小太郎はそう言って茶を啜っていた。

此処は、攘夷浪士の拠点の一つだ。

「で、どうしたんだ銀時。高杉の情報をくれなんて。夜中の三時だぞ？」

「…神楽が攫われた」

小さく言った言葉に桂は茶碗を落としそうになる。

「リーダーが！？どうした！」

桂は勢いで立ち上がる。

「…それを聞きに来たんだろうが」

立ち上がった桂を見ず、銀時はただ横を見ていた。

桂の頬に汗が流れた。

桂は静かに座る。

「これと言って大層な話は無いが…知ってるか銀時」

「知らねぇよ」

「…まぁそう拗ねるな銀時。今、春雨と鬼兵隊が繋がっているのは知ってるだろう？」

「…あぁ」

あのガキの御陰様で、と心中で呟いた。

「それで、今江戸を崩壊させる手立てを考えていたとは聞いたが…」

「考えてい“た”？えっ何？過去形？」

「銀時、昔の町外れの近松村で起こった近松蠍事件（ちかまつさそりじけん）の名位は知っているだろう？」

「あれか…確かどっかの頭がいった奴が毒まきやがったせいで起こった事件だろ…？でもありゃ死者は零で、誰も体を壊してねぇっつう話だろ？」

耳をほじった銀時は何か変かよ？と聞く。

「それをやったのは――春雨だ」

その言葉で銀時の眉間に皺が寄る。

桂は気にせず淡々と話す。

「当時春雨はその村のとある住人を消したかったのだ」

「とある…住人？」

「結構昔だが、死体屋と名乗る奴らが居た」

「死体屋？」

「あぁ、殺し屋よりも正確に殺す奴らだ。ソイツらは……夜兎族の奴らで、そこで匿われてた。春雨にとってはソイツらが邪魔だったのだ」

「何でだ？」

銀時の問いに桂は静かに応えた。

「春雨の幹部を殺しまくって悪行を出来ぬようにしたらしい」

「…成る程な。だが、夜兎だからって毒が聞かない訳は無いだろう？つうか、春雨がそんなヤワな毒まくか？普通」

「そんな訳あるまい。春雨は村人共々殺すつもりだったからな」

「だったら…」

何で誰も死んでねぇんだよ？と銀時の頭に多々ある疑問が更に増えていく。

「死体屋の『風紀』という女の御陰らしい」

銀時の目を見て桂は話す。

「その女の得意とするのは…毒作り。しかも、その毒は自分の血らしい」

「…血？」

「あぁ。どうゆう経緯でそうなったかは知らぬがソヤツの血、毒にも薬にもなるらしい」

「…」

「ソヤツは自分の血を流し、村に漂う毒を自分の血の毒で相殺したのだ」

「…んな事」

「出来る筈が無い…とでも言いたいのだろうが、仕方があるまい。現実なのだからな」

うむうむと頷く桂に銀時は「で、それが…何だよ。今には関係ないだろ？」と言って頭を傾げた。

「だから言っとるだろう。ソヤツの血は猛毒になると。では、それを、血が猛毒になる生物を作れないかと春雨の一人が考えたらしい」

「…？」

「ソヤツらは結局死んだらしいが…その時その女の死体からは猛毒が出て、その周りに居た奴らは皆死んだらしい。周り、と言っても半径３０キロ位の距離だったらしいが。鉄や金なども貫く、という話だ」

「それが、もし…」

銀時の力無い声に桂が頷いた。
「そうだ」
桂は神妙な顔をして、
口を割った。
「江戸でやられたら皆、死ぬ」
「…」
銀時の顔が強張る。
「だが、ソイツだけなんだろ…そんな死体になっちまう奴はよ？」
「だが、春雨の中の貿易相手の奴隷商人達は血が毒にさせる事に成功させたらしい。夜兎族の子供だ」
「だったら…何で神楽が攫われるんだよ」
「その子供、他に捕らわれている奴らと一緒に逃げたらしい」
「…」
「だから…リーダーが攫われたのだろう」
「今、高杉は…何処に居るんだ？」
「分からん。江戸をそんな風にさせたくないのはやまやまだが…す

まぬな」

桂はそう言って、俯いた。
銀時は頭を横に振って、「邪魔したな」と呟いた。
銀時は立ち上がり、扉を開け、
外に出た。

「高杉…貴様は本当に遠くなってしまったのだな…」

銀時が去った後、桂が呟いた友への言葉は、

誰にも届かなかった。

体と心は比例するようで反比例。（前書き）

スイマセン！

この前の話の銀さんのコメント、くれりとなっていますが、くれるです！

神楽：本当にいい迷惑ネ。

風雷：…神楽が今更言うか…。

神楽：勿論ネ！私が言わずに誰が言うアル！？

風雷：…坂田さん？

神楽：今居ないアル！風雷のせいアルけど。

風雷：悪ぃ…。

洒流奇：神楽、風雷を苛めちゃダメだよ？この子は――

風雷：ストップ！お前何言おうとした！？

洒流奇：風雷はツンデ――

風雷：黙れっ！

洒流奇：フゲッ。

体と心は比例するようで反比例。

風雷は神楽の鎖をぶち壊した。
勿論、自分のも。
脱衣場に鎖が散らばった。
そして、服をぐちゃぐちゃのまま床に置くと風呂の中に入った。
風雷は体を一通り洗ってから温度を確かめるように恐る恐る右足を入れる。
神楽は先に湯船に浸かっていた。
風雷が湯船に入るとザバァンと水が流れた。
二人でクスッと笑いあった。
だが、風雷の表情は少し堅い。
なにせ、傷が染みるのだ。

「大丈夫アルか風雷？」

「あぁ、平気」

「なぁ…風雷」

「んっ？」

神楽はブクブク水中で息を吐く。

「あいつらに風雷は何されるアルか？」

風雷はその質問を聞いて、あっさり応えた。

「大丈夫。大した事じゃないよ。ただ少し毒を飲まされるだけ」
神楽が勢いよく立つ。
水に波紋が作りだされた。
「だっ大丈夫じゃないアル！それって…！」
怒りで回らない呂律を回らせて、神楽は舌を噛んだ。
一人痛みで悶えているのを見て風雷は微笑ましいようすで見ていた。
「大丈夫だから。安心して」
「安心出来る訳無いネ！私が――」
「神楽が何出来るの？」
腕をぐわんぐわん振り回して怒りを表現していた神楽の動きが止まった。
そして、俯く。
「…神楽は俺に希望を与えてくれればいいから。なっ？」
「…嫌アル」
悲しい声を発する神楽。
「…」
「私は風雷が傷付いて欲しく無いネ。だから、無力でも良いから…風雷を手助けしたいネ」

「…」

「駄目アルか？」

神楽が頭を傾げる。
神楽の顔に勢いよく水が弾いた。
頭がビショビショになった神楽は数秒の間ポカンとして脳内で情報を処理。
処理後、「何するネ！人が心配してるアルヨ！」と激怒。

「神楽は此処から出たいか？」

優しげな笑みは神楽の怒りの気持ちをうやむやにする。

「そりゃ銀ちゃんや新八の所に帰りたいアル…」

俯く神楽。
そんな神楽に風雷はまた、
水をかけた。

「ちょっ…何するアル！ちょっやめるアル！」

「だったら…俺の言う通りにして」

「なっ何言って…」

「帰りたいだろ？」

有無を言わさず強く言う風雷の言葉に神楽は小さく頷いた。

「今は我慢してくれ」
強い言葉に神楽は黙り、頭を縦に振った。
風雷は満足そうに頷いて、「のぼせちゃうだろうから出な」と神楽を外に出した。
神楽は脱衣場に置いてあるタオルで体を包む。
風雷は一回外に出るとポーチだけを取って再度風呂に入っていった。
神楽は着替え終わって言われたとおり脱衣場で鎖を弄りながら待っていた。
数分、いや数十分位経っただろうか。
やっと風雷が風呂から出て来た。
風雷は真っ白な体を拭くと、ボロボロの服に腕を通した。
「ふぅ…大丈夫か神楽？長くて悪かったな」
「別に…平気ネ」
立ち上がった神楽にのぼせたせいか頬をほんのり赤く染めていた風雷が優しく笑って、
「ありがとな」
礼を言った。
二人は扉を開けた。
部屋には夕食がお盆に乗せられて置いてあった。
「ご飯アル！」
喜んでキャッキャ言う神楽はすぐさま箸を取って、

「いっただきまーす！」

元気良く米を口に流そうとした。
だが、神楽は手が掴まれて米に箸が届かなかった。

「…どうしたアル風雷？」

ぷくっと頬を膨らます神楽に「ちょっとごめん」と米を取ると鼻を近付け、匂いを嗅いだ。
神楽は何かおかしいか分からない。

「神楽…今日の夕食は俺のポーチの中の葉っぱにしな」

ひょいっと神楽の箸を取って床に置いた。

「何でアル？」

「毒が入ってる」

「！」

神楽の顔が強張った。

「毒って…」

神楽も米の臭いを嗅いだ。
普通の温もりのある米の良い香り。
思わずよだれが出てしまいそうな位良い香りだ。

「はい。今日の飯だ」
そう言って風雷は小ビンの中の葉を数枚取って神楽の手に乗せた。
「…コレだけアルか？」
「数日続けられたら困るだろ。我慢しな」
むしゃむしゃ食べる風雷は美味しそうな顔をしていた。
神楽も恐る恐る口に入れた。
「…何にも味がしないアル」
何となく体に良さそうな葉の香りが口内を占拠する。
心情的には物足りない感じだが、体がもう食べれないと言っている感覚がした。
「例え量が少なくても栄養がその分有れば良いんだよ」
ウィンクをした風雷に神楽は成る程と納得した。
「じゃあコレ…どうするアルか…？」
勿体無いよ？と神楽は目で訴える。
ようは、神楽は何となくまだ食べたいのだ。
体が拒否しても心がＯＫサインを出している神楽は風雷の服の袖を掴んだ。
「天人、コレ要らない」

風雷は2つのお盆を持って窓を開けて、
落とした。
「米ええぇぇぇぇーーー！」
「あっつぅぅぅぅぅぅーーー！！」
外に居た天人と神楽の絶叫が春雨の戦艦に響いたのだった。

「ねぇ…阿伏兎？」
「何だよ団長」
「あの風雷って子、調べといて」
椅子に腰掛けている神威の言葉に阿伏兎は唖然とした。
「はっ…？」
それ位しか言葉が出ない位。
阿伏兎の反応は当然と言えた。
何せ宇宙海賊春雨は様々な戦いが有り、様々な問題が有る。
そんな情報量の中で一人の小娘を見つけるのは――
川で元気に砂金取りしているようなものだ。
「宜しくねぇ」

神威はそう言うとグルンと椅子を回して阿伏兎に背を向けた。

「まぢかよ…」

阿伏兎の呟きは神威に聞こえたか聞こえなかったかは、神威にしか分からない。

体と心は比例するようで反比例。（後書き）

入浴あったけど、エロくありませんよ！！

嗅覚が凄いってそれって犬なの？えっ犬なの？（前書き）

洒流奇：今回は鬼兵隊の高杉と第七師団、神威、阿伏兎でーす。

神威：こんにちはー。

高杉：…。

阿伏兎：…こんにちは。

洒流奇：三人って仲良いの？

神威：さぁ？

阿伏兎：…仲良いか…？

高杉：仕事の付き合いだ。

洒流奇：…とりあえず仲良さそうだね。

高杉：目大丈夫か、テメェ…。

洒流奇：多分。右は1あるよ？

高杉：…。

嗅覚が凄いってそれって犬なの？えっ犬なの？

はてさて、部屋でぐっすり寝ていた神楽はふと目が覚めた。
隣にいる風雷を見た。
居ない。
神楽は周りを見渡す。
風呂の電気が点いている。
静かに脱衣場の中に入る。
水の音はとりあえず聞こえない。
神楽は軽い気持ちで扉を開けた。
中には――
風雷が少し切れて血が出ている指の血で小瓶を詰めている光景だった。

「ふ――」

神楽の開きかけた口が風雷の小さな手で覆われる。
風雷が切れてない綺麗でしなやかな人差し指を唇の前にセットし、
静かにしてと口パクで神楽に教えた。

「（…何してるネ？危ないアル。今すぐ止めるアル）」

「（こうしなきゃ駄目何だよ）」

「（駄目アルよ。風雷只でさえ傷だらけアルよ？）」

「（頼む…神楽も帰りたいだろ？）」

その言葉は神楽を黙らせるのには充分だった。

「…おやすみ」

そう言って風雷は扉を閉めた。

夜は長い。

―ＮＥＸＴ　ＤＡＹ―

「ほい。コレを飲め」

高杉に投げられた小瓶を片手で風雷は受け取った。

風雷の鋭い瞳は高杉に向いたままだ。

「因みに…この毒は効果は？」

高杉は「以前」と言いながら近くで笑って成り行きを見ている神威を見た。

「アイツを捕まえる時に使った奴だよ」

以前、高杉と春雨が手を組んだ矢先に起きた事件（丁か半か）。

神威が危険視されて、処刑されかかった時に使われた毒――象さえ混濁させる猛毒。

それを小瓶いっぱいに入れ、

風雷に渡したのだ。

「致死の可能性は？」

「まぁ少しは有るなぁ。まっそこのガキも耐えられたんだからテメェも耐えられるんじゃねぇのか？」

「神楽にコレをやるのか…？」

「テメェが一発ケイオーだったらな」

「だったら、」

風雷は小瓶の蓋を床に落とす。

コロンと小さな音が静かな部屋に響いた。

「余裕だな」

風雷は笑って口に一気に流し込んだ。

「はぁ」とまるで風呂上がりの牛乳のように声をあげた風雷は唇を袖で拭く。

「ふぅ…消化中っつうのはやっぱり重たいな」

ピョンピョン跳ねて溜息を吐いた風雷は、「じゃあ戻って良いか？神楽が心配してっから」と言ってドアノブに手をかけた。

「…おい」

その背中を高杉が止めた。

「何だよ？」

みすぼらしい服を翻して風雷は高杉を見た。
「オメェちゃんと飲んだのか？」
「テメェの前で飲んだだろーが」
ギロリと見下した高杉の視線に風雷は嘲るように笑った。
「片目は坂田銀時を守る為に天人にやられたからって大丈夫かよ？見えるかー？」
挑発的な言葉に高杉は――
「…テメェ。何であの時の事知ってんだ」
質問した。
問いただした。
そう、それはアノ時に戦った者しか知らぬ事。
それが、
こんな子供が知っているのはおかしい事だ。
「んー別に良いだろ？それとも、そんなに知られたくない事だったのか？」
ニコッとわざとらしく微笑んで、
風雷は高杉に自ら近付く。
「なめんなよ。俺は生きるのに必死なんだよ」

高杉の、
胸倉を掴んだ。
爆弾なりの、
お返しだった。

「じゃっ帰らせてもらおうか、一人で帰っちゃいけねぇんだよな？」

手を離して、クルリと踵を返した。
高杉はその背中を、ボロボロな服で覆われた小さな背中を、
精一杯睨む。
やがて、「フン」と息を吐いて神威に目で言う。
神威は「はいはい」と言いながら頭の後ろで手を組んでいる風雷の
後ろに立った。
それを確認した風雷は扉を開けて外に出た。

「君さ…何もおかしな感じは無いの？」

外に出た途端の神威のコメントに風雷は「何がだよ？」と適当に応
える。

「毒だよ。流石にそんなに普通には無理でしょ？」

神威が疑問を感じるのは無理も無かった。
自分でさえ、意識が朦朧としてぶっ倒れたのだ。
そんな神威には、今の風雷の状態に、おかしいと思わない筈が無い。

「なんでだよ。別に無理矢理やればいける。あぁ、そういや傘何時
返してくれるんだ？」

「返さないよ」

神威はハッキリ言う。
「返してなにかされたら困るし」
「ふうん…？つまり、俺が怖いの？俺に勝ったくせに」
ダッサと薄い唇を上下に動かして、悲しそうな笑みを浮かる。
「どうかした？」
「あんたさ、良いよねぇ」
風雷は心底羨ましそうに声を出した。
「何が？」
「家族を否定出来て」
「…？」
思わず頭を傾げる神威。
だが、残念ながら後ろに居るのでその顔は伺えない。
「家族、つうか雑魚は要らないって言ってるんだってね？良いねぇ。そーゆー事言えんのは周りに雑魚も居るんだろ？」
「知らないよ。興味無いからね」
「良いねぇ。『興味無いからね』っか。くぅ、言ってみてぇコメン

トだよ」

「…言えば？」

風雷は一旦足を止めて振り返った。
笑みを消した無表情の神威と数秒間目が合う。
やがて風雷はプッと吹き出す。

「ははっ…そんな事言えたら良いよねぇ…？つうか腐ったテメェをまだ諦めてない家族が居るなんてねぇ。感動だね」

「…興味無いよ」

「興味無い？何言ってんだよ」

笑って言葉をスラスラ紡いでいた少女の顔から――
表情が消えた。
真っ直ぐ神威を睨んでいる。
組んでいた腕も下ろした。

「だったらアイツを此処に連れてくんじゃねぇよ」

静かな怒りを神威は感じた。
荒々しいような――妙に静かな怒りが、
神威を襲う。

「あんな人の為に必死こいて自分を傷つくのを厭わねぇ馬鹿を、父さんでさえ殺しかけた兄ちゃんをまだ諦められない馬鹿を、」

バァンッ！と音がした時、壁に風雷の傷だらけの右手が食い込んで

いた。

「連れてくんじゃねぇよっ！！」

廊下の隅の隅まで響く声は、
神威には響いたか、否か。

その後風雷は「傘返せよ」と言って神威に背を向けて部屋に向かう。
神威はその背中を追う。
笑いもせずに。
風雷を部屋に入れると神威は外の番人の夜兎に「頼むよ」とだけ告げて戻る。
何も考えずに。

「風雷平気アルか？」

昼食を目の前にして少しよだれを垂らしながら聞く神楽に風雷は「平気」と言って笑った。

「風雷、朝食は平気だったアルから、昼食も平気アルヨネ？今度はちゃんと食べるアルヨ？」

朝食には何も入っておらず、その時風雷は神楽に「俺のも食べて」と言った為、風雷は朝食を食べていない。
風雷は昼食の匂いを嗅ぐと、コクンと頷いて「全部食べな」と言った。

「風雷は食べないアルか？」

神楽の問いに風雷は「食べる気分じゃねぇから」と言って風呂に向かった。

「風雷平気アルか…？」

神楽は真剣に考えても分からず、結局ガツガツ食事。
その頃には、すっからかんになっていた。
さっきの事は――忘れて。

風呂上がりの女の子のお誘いした場所は涼しげな所が良いかな？（前書き）

洒流奇：ハーイ、以前の前書きグループに風雷投入。

風雷：…何で俺が加わったんだよ？

洒流奇：勘。

神威：てか俺達だったら話す内容無いと思うよ？キャラ崩壊するだろーし。

高杉：どう意見だ。テメェみたいな国語の平均点取れずにヤバいとだけ思ってる奴が書ける筈が無い。

神威：ありゃりゃ。そうなの？

洒流奇：レッツUターン！

風雷：逃がさねぇ。

洒流奇：離せ風雷！俺は、俺は行かなきゃならない所があるんだ！

高杉：布団でのほほんとした奴が何を言ってんだ。

神威：で、変な事するのかな？下手したら君、殺されちゃうよ？（俺に）

風雷：半殺しの方が良くないか？

高杉：なんなら生き地獄はどうだ？

神威：生き地獄って具体的にどうするのかな？

洒流奇：変な所で意気投合しないで！作者だから！作者だから！

阿伏兎：俺は忘れられてるんだな…。

風呂上がりの女の子のお誘いした場所は涼しげな所が良いかな？

「ゲホッゲホッ…」

風呂に入ると抑えていた咳が出てきた。
手で覆って、落ち着いてきたのでその手を見た。
僅かに血で染まっていた。
それを見て風雷はクスッと愛らしく笑った。
風雷の雪のような美しい背中の右肩らへんに丸い判子のようなモノが描かれていた。
中には竜が、

その首に纏わりつく鎖に、

囲まれていた。

「…良かった」

昨日神楽と一緒に入る時出来る限り背中を見せなかった。
神楽もおかしいとは感じないみたいで良かった。
神楽は何か分からないだろうが、
神威は分かる。
だからバレてはいけない。

「洗おう」

さっきの毒の消化でか、体が重い。
あの時、もっと酷い毒を飲んでたじゃないか。

「…私も雑魚になったな…」

ははっ、と力無き笑いが風呂の中に響く。
早く体を洗わないとは、という事で体に水を打ちつける。
血はゆっくりと下に流れていく。
最終的に美しいラインの体から離れ、
流された。
体を湯船に浸ける。
リラックスしていく体から疲労というものが出た。
やがて風雷は湯船から出て、風呂から出た。
体にタオルを巻いてゆっくり服を体に捲く。
ドアを開けた。
神威が居た。

「！？」

風雷は驚愕とした。
神威の傍らには倒れた神楽が居た。
争った形跡は無い。
それに、音も無かった。

「ちょっと薬で寝てもらってるだけだから。話、良いかな？」

薬…？
風雷の頭に疑問が浮かぶ。
そんな匂いは…無い。
無かった筈。

「飲み物だよ。そんな事良いから来てもらえるかな？」

「…」

風雷は肩にかかってるタオルを床に置く。
濡れた頭を左右に振って犬のように水を落とす。

「分かった…。神楽に何もすんなよ」

「勿論♪」

笑った神威はほのかに温かい風雷の細い手首を握る。
風雷は顔を僅かに歪ませた。

「痛ぇよ」

「我慢だよ。さて、じゃあ急がなきゃなんないから」

グイグイ引っ張り、ドアを開けた。
分厚いドアはゆっくり開いた。
そして、
閉まった。
神威のやや速いペースに息も乱さず風雷はついていく。

「はい、入って」

風雷は部屋に押し込まれた。
小さな部屋だった。
六畳も無さそうな部屋。
そこに、固そうな鉄の椅子と正反対に柔らかそうなソファが有る。
そのソファには高杉が優雅に座っている。

神威は風雷を鉄の椅子に座らせる。
椅子には手を置く所が有り、そして手を置く所には、
動かさないように縛る手錠が有った。

「…何だよ。わざわざこんなご大層な椅子を寄越して」

神威の手により、無理矢理手錠をされ、外されないようになる。
風雷は引っ張る。
椅子がガタンガタン揺れるだけだった。
良く見るとその手錠は普通のモノとは違う。

「無理だよ。それは壊せない」

「どーも、素晴らしい御忠告感謝します」

風雷は唯一動ける足で椅子の脚を蹴った。
この椅子もかなりの硬さで、そう簡単そうには壊れそうに無い。

「チッ…」

舌打ちをした風雷はやむを得ず前を向いた。
笑っている最強タッグに少しカチンときながらも風雷は冷静だった。

「君、親は？」

神威の問いに間も空けずに風雷は答える。

「死んだ」

「親はどうして死んだ？」

「戦争で」
「戦争？何でテメェの親が戦争してんだよ」
高杉が話に入ってくる。
「知るか」
目線を逸らして溜息を零す。
高杉が神威を見る。
神威はコクンと頷くと動いた。
風雷の細い首に――神威の指が食い込む。
「脅迫か？」
大して力が入ってないのか風雷は余裕綽々の顔で神威を見上げた。
「そうだったらどうすんだ？」
高杉の問いに風雷は笑った。
「別にな。俺が死んだら困んのオメェらだしな」
「あっ…？」
高杉が顔をしかめる。
神威は目を開いて風雷の脈をただ感じていた。
「最初の実験から気付いてんだろ？俺はフツーの夜兎の奴らより毒

に抗体があるっつう事。さて、此処でお前らが俺を殺しました――するとお前は神楽を使う。だが、神楽は全く毒に無縁の生活をしてたんだぞ？頑張っても一年はかかる。つうかオメェらは自分達側の夜兎の奴らは殺したくないんだろ？だから神楽を捕まえた。そこでオマケとして付いてきた俺が神楽より使える事が分かった筈。だったら――」

バキンッ

風雷の手錠が悲鳴をあげた。

「俺を殺せるか？」

風雷は神威の腕に手を添えた。

「あの手錠を取りやがった…」

高杉が風雷を忌々しいように睨む。

神威は違う所に疑問を感じたのか、目を見開いて口を開いた。

「君は毒に縁のある生活を送ってたの…？」

神威の問いに風雷の動きが一瞬止まる。

だが、すぐに「さあね」と言って立ち上がった。

「んな事良いから傘返せ。傘」

「どうする高杉～？」

「けっ…返してやれ」

「へっ？」

こりゃまた何で？と言葉を吐いた神威は驚いたようで風雷の首から手を離した。

風雷は首をさすって「傘…返してくれんだよな…？」と思わず頭を傾げた。

「ただし、テメェの情報をこっちに寄越せ」

「はいはい。分かりましたよ」

「そんな事かよ」と溜息を漏らした風雷。

「俺は今地球で『半殺し屋』をやってる。それとある程度情報力はこれでも保持してる」

「『半殺し屋』って？」

神威の純粋な質問に、

「前の奴を読み返せ馬鹿野郎」

風雷は変な解答を出した。

ってえっ？止めて下さい。設定壊すの！

「まぁ作者がうっせぇが分かったか？」

「ふうん…成る程。高杉も見る？」

現代の携帯を一丁前に使いこなした神威は高杉に画面を見せる。

高杉は一瞬視線をやるとすぐに風雷に戻した。
…って宇宙にまで電波届くんだ…？
「まぁそれで良い…神威、渡してやれ」
神威がハイハイと五月蝿いなぁとでも言いそうな顔で外に出た。
「んで…俺と二人きりでいいのかよ？」
「どーゆう事だ？」
「テメェを殺っても良いのかって事だよ」
高杉がフンッと嘲るように笑った。
「テメェに殺られる程弱かねぇよ」
「ふーん、っと」
風雷は椅子に座り直して頬杖をついた。
「さいですか」
「そぉーだよ」
「なぁ」
「なんだァ？」
「何で地球を消したいんだよ？」

「当たり前だろ。松陽先生を――」
「生死を気にしない世界だからか？」
高杉を楽しそうに見つめる風雷。
高杉は風雷を、
睨む。
「でもそのわりにはしょうよう先生だつけ？その人の存在が嫌いなんだな？」
「ハァッ？何言ってんだテメェ」
「だってさ、お前その人の生きた歴史を消したいから地球を消そうとしてんだろ？」
「んな訳――」
「あるだろ？」
風雷の強い言葉に高杉の冷めた心が少しずつ熱を帯びる。
「だってさ、だったら生きた証を俺は残したいし、残してほしーし。分かる？つまり――」
風雷は高杉に近付き、
高杉に顔を近付けた。
互いの顔が数センチ先にある。
互いがすぐに殺せる距離に。

「あんたはしょうよう先生を憎んでる訳だ。っくう悲しいねぇ」
高杉から顔を離すとやれやれと手を広げた。
高杉はそんな風雷の――
胸ぐらを掴んで、
引っ張る。
そして、
怒気が籠もった声を風雷へと向けた。
「テメェ何かが分かるもんじゃねぇ」
だが、
風雷は慌てず、
高杉を見据えた。
「分かる訳ねぇだろ。他人なんだからな」
高杉は高杉よりも冷めた瞳の自分の映っている姿を見る。
憎そうに歪めた顔――では無かった。
目を見開いて驚いていた自分の顔が映っていた。
自分が映っている瞳が細まった。
「っつう事を言いたかっただけだ。離せよ」

高杉の手を振り払った風雷は高杉の横、ソファに尻を沈める。
「うわぁ…柔らかいなぁ」と無邪気な子供のように喜ぶ姿は「分かる訳ねぇだろ」と言ってた子には見えない。
見えない。
高杉はギッと歯ぎしりした。
俺はこんなガキに言い負かされたのか。
高杉の心中は複雑になっていった。

モノを返してもらえたなら、御礼を云うのが礼儀だ。（前書き）

洒流奇：スイマセン、短いです！

銀時：今更謝るのか。そして今更俺を出すのか。

洒流奇：えっ…ちょっご機嫌ナナメ！？

銀時：前の時のトーク番組にも変なのが出てよぉ…。俺の唯一の出番がねぇじゃねぇか。もぉ良いよ。うん、殴られたいのか？殺されちゃう？

洒流奇：ちょっそれは神威の言葉…ブヘッ！

銀時：ウオカァハッーのカ○ハメ○ー！

洒流奇：某アニメの技を叫びながら殴るんじゃなーい！！

モノを返してもらえたなら、御礼を云うのが礼儀だ。

「ただいま～」

神威の言葉が部屋に入ってきた。ニッコニコの笑みを貼り付けて登場した神威に風雷が「傘は？」と聞く。

「ほいっどーぞ」

神威から風雷の傘が投げられた。
風雷は自分の傘か確認するように中途半端に開いて、閉じる。

「じゃー帰って良いか？もーヘトヘトだから」

うーん、と言いながら伸びをしている風雷。

「…あぁ好きにしろ」

高杉は何時も通り神威を見、神威も了解と言って風雷を返す。
そう、

返す。

二人は静かに部屋を出る。
高杉は目を閉じて、思い浮かべた。
あの、刀の使い方、武士の道、生きる道を教えてくれた人を。

神威とは会話をせず、風雷は部屋に着いた。
厚い扉がゆっくりと開いていく。
その間に入ると風雷は後ろに居た神威を見た。
風雷と神威の視線が合う。
神威は一瞬目を細めたが、すぐに薄っぺらい笑みで扉を閉めた。
風雷は閉まった扉をしばらく見つめていたが、すぐに神楽を目で探す。
すぐに見つかった。
神楽は床で寝息をたてながらすやすや寝ていた。
風雷は良かった…と言葉を出さずに唇を動かして神楽に駆け寄った。
傘を置いて神楽を抱える。
静かに脈などをはかってから風雷は安心したように微笑んだ。
次の瞬間、風雷は自分の腕に噛みつく。
そして、腕を見る。
腕からは僅かに赤い液体が流れていた。
風雷はソレを神楽の口に流した。
神楽の唇に赤い痕が付く。
風雷は自分の腕を舐めて、血が止まったのを確認してから神楽の唇を指でなぞって血の痕を消す。
そして、静かに横たわらせた。
傘を手に取ると、風呂に向かう。

「…もう少し」

不気味に笑った風雷は扉を閉めた。

拳と拳で語る話って実際問題、拳と殴れられた場所の話じゃね？てか拳と拳が当

銀時：今回の俺さぁ…

洒流奇：何も言うな！ネタバレじゃん！

新八：やっと僕が…！！

洒流奇：十九話でやっとだね。

新八：この日をどんだけ待ちわびたか…！！

銀時：てかたったの2日で二十話近くって凄いな…。

洒流奇：だねー。

銀時：…お前面倒になってきたのか…？

洒流奇：うーうん、違う。ただ、掲載ばっかしてて第一章の続き全然書いてないんだ。

銀時：…。

洒流奇：今まで1日2話位出してたけど第二章からは不可能です！！って思うとアクセス数下がるなぁーって。

新八：でも実際問題凄いじゃないですか。たったの一週間で四千アクセス越えたんですよ？しかもお気に入り三人もいますし、感想も書いてもらってますし。

洒流奇：本当に感謝感激だよなぁ…。こんなウチの為に…。

銀時：何っ？お前？面倒なんだけど。そろそろ相手するの面倒なんだけど。

新八：まぁまぁ銀さん落ち着いて。相手してあげましょうよ。

洒流奇：何か新八のその口調ウザイ。

銀時：だな。８のくせにいきがって。

新八：何で僕の相手はこんなんだろ…。

「おはよーございます…ってあれ？…銀さん？」

所変わって数時間前の万事屋。
何時もどおりやって来た新八は元気に扉を開けた。
中には深刻そうな顔をした銀時がソファに座っていた。

「…銀さん？」

そこで新八は異変に気付いた。
神楽が居ない。
馬鹿で食いしん坊でボケの度が越えているあの神楽が居ない。

「銀さん…神楽ちゃん…は？」

「…昨日の事知んねーのか？」

絶望したように暗い声が新八の耳を痛める。

「昨日…？」

新八は眉間に皺を寄せた。
新八は昨日家に帰って残り物を調理して久しぶりのちゃんとした御飯にがっついて満足したので、お通ちゃんの曲、『お前の父ちゃん××』を聞きながら盛り上がり、そのままご就寝。
つまり、昨日何があったか知る由も無いのだ。

「…何が？」

新八は急いで机の上に有るチャンネルをひんだくってテレビを点ける。

芸能界のチャンネルから様々な奴に変えているとニュースのテレビを見つけ、そのままテレビに張り付くように見た。

『えー今昨晩起こった事件場、廃工場に来ています。見て下さい！近くの無人のアパートの粉砕された壁を！そして反対方向の彼方、爆弾を投げた後のように燃えた痕が有ります！一体何が有ったんでしょうか！？目撃情報によるとチャイナ服の少女と少年が攫われたらしいです。あっ真選組の方が来ました！一言お願い――』

新八はブチッとテレビを消した。

「銀さん…コレは…？」

「神楽が…攫われた…」

その言葉に新八が顔を強ばらせた。

「…攫われた？」

「あぁ…そうだ」

新八は銀時に近付いて机を思いっきり叩いた。

「助けに行きましょう！」

新八の言葉に銀時は――

「どうやってだよ！」

叫んだ。

心底苦しそうに。

「俺だってすぐに助けに行きてぇよ！だけどアイツん所に行く方法がねぇんだよ！」

「行く方法が無きゃいけないんですか…？」

新八は銀時の悲痛な叫びに新八は拳を握って、

銀時を殴った。

「オメェは馬鹿だろ！僕達が頭を動かす事なんて無理に決まってんだろ！？何で行く方法がなきゃ此処で必死こいて考えるんだよ！？行く方法がなきゃどんな事をしてでも作れば良い！今までそうやって頑張ったじゃないですか！？忘れたんですか！？」

新八の言葉は倒れた銀時の耳に大きく響いた。

頭にまで響く位。

銀時はゆっくり立ち上がる。

そして、

新八を殴った。

勢いよく倒れた新八は銀時を見上げた。

「そうしたって無理なもんは無理なんだよ！色んな所回って考えたよ！？だが、俺達に宇宙船渡してくれる奴なんて居ねぇだろ！？」

「宇宙船って…どうゆう事ですか？」

「神楽は糞兄貴に捕まったんだよ」
銀時はそう言うと新八に背を向けて「テメェは帰りな」と言った。
「…」
新八は立ち上がって銀時の肩を掴んで引っ張る。
銀時のクマが出来た疲れた顔が此方に向く。
そして、
再度殴った。
「んな事知るかよ！」
銀時は無様に崩れた。
「何でテメェは一人で何でも抱えんだよ！そんなにつらきゃ分けろよ！テメェは一人なのかよ！？テメェには誰も居ないのかよ！？違うだろ！？少なくとも――」
涙ながらに語る新八は自分の胸に手を置いた。
「僕はずっと銀さんの味方ですよ…」
瞳を潤ませ、銀時をただひたすらに見る新八。
銀時は立ち上がって、
新八を殴った。
新八は倒れてすぐに上を見た。
銀時が笑っていた。

「行くぞ」

新八は涙を拭いてから元気よく頷いて銀時の横に並ぶ。

「何で殴ったんですか…？」

「だって駄メガネに殴られっぱなしは嫌だったからな」

「なっ…それだけで殴ったんですか！？」

「小せぇ男だぞ新八。時として男は我慢するべきだ」

「…どっちが小さいんですか…」

そう言った新八はクスリと笑った。

二人は元気よく扉を開けた。

真っ青な空は二人を眺めていた。

そんな勇気を手に入れた銀時達は知らない。

未来自分達が起こる出来事を。

「なぁ知ってるか？」

頭がかなり長い天人が笑った。

「あぁ…アレだろ？」

『アレ』とは最近春雨の中で出回っている噂である。
現段階、第四師団と第十二師団の団長は不在である。
そこで、
ある“男”達を殺せば団長になれるという噂が。

「分かってんなら行かねーか？」

「だったら俺も」「ひはっ俺もだ」「俺も俺もー」「ミーも」「俺はどーしよ」

そう言いつつも天人達は武器を手にする。

「行くぞ…坂田銀時と桂を討ち取りに！！」

「「「オオー！！」」」

そして天人達は船に乗り、向かう。
上品とは云えぬ笑みを浮かべながら。

頼む人に文句言ってはいけません。（前書き）

銀時：今回も銀さんキタァァァァァァァ！！

新八：僕もキタァァァァァァ！！

洒流奇：おめでとさん。

頼む人に文句言ってはいけません。

「ヅラ。頼みが有る」

銀時と新八は今ファミレスに居た。
目の前では桂が蕎麦を口に含んでいた。
銀時と新八の所には食事といったモノが無く、水が置いてあったが中に有ったろう氷は殆どが溶けていた。

「ふむ…何の…（ズルズルッ…モグモグ）…用だ銀時」

「…桂さん。頼む側ですけど言って良いですか？」

「何だ」

新八は水をのどに流し込んだ。
勢いよく空になったコップを机に置いた。

「何でテメェはこんなシリアスの時に蕎麦食ってんだよ！？しかも何でチョイスが蕎麦なんだよ？つうかもう三時だぞ！？飯食ってんだろ！？」

フゥと息を吐いた桂は蕎麦の汁を飲み干すとゆっくり机に置いた。

「新八君よ、落ち着きたまえ。武士はいかなる時でも食べられる心が必要だぞ」

「殴っていいですか？殴っていいですか？」

「まぁ落ち着け新八。んな事ヅラに頼んだって意味ねぇ事知ってんだろ？」

「…そうですね」

新八は溜息を零して桂を見た。

「…アレッ？エリザベスさんは…？」

新八は頭を傾げた。
桂は変なペット……いや、以前地球を乗っ取る為のスパイを一緒に連れている。
それが今日は見えない。

「エリザベスは今情報を集めている」

水を口に流した桂は外を見た。
今にも降り出しそうな雲が風に流されている。

「ヅラ、船を貸してくれ」

「銀時…」

「勿論、乗るのは俺と新八だけで構わねぇ。乗り方さえ教えてくれりゃあな」

「お願いします」

新八は頭を下げる。

銀時もゆっくりと頭を下げた。

「…銀時、一つ言っておこう」

「なんだ？」

桂はニコッと笑った。

「ヅラじゃない桂だ。これから一緒に戦に向かう奴の名位覚えておけ」

「…桂さん」

新八は顔を綻ばせる。

「だがまずは相手が何処に居るか知らなくてはならない。エリザベスの情報を待とう」

「サンキューなヅラ」

「ヅラじゃない桂だ」

ファミレスの一席から明るい笑みが零れ落ちたのだった。

銀時達は鉛色の空を仰ぎながら今歩んでいた。
銀時達は桂の拠点に向かっている。
そんな時、桂の携帯が震えた。

桂は携帯を開いた。

「…誰からですか？」

新八の問いに桂は「エリザベスだ」と答えた。

「何て内容が書いてあんだ？」

「『桂さん逃げて下さい。高杉が桂さん達を狙ってます』と書いてある…」

「逃げて下さい…？」

新八は頭を傾げた。

「何で高杉が今更俺達を狙うんだ…？」

銀時は腕を組んだ。

桂は携帯を仕舞うと「とりあえず早く行くぞ」と言って足を動かした。

「伏せろ！」

銀時が叫んだ。

桂はすぐに伏せ、新八は銀時に頭を掴まれて伏せた。

刹那、パンパンと乾いた音が響く。

今は夕方の５時。

５時だが、周りには人っ子一人居ない。

だが、音はずっと続く。

「銀さん何ですかコレは！？」
「知るわけねぇだろ！」
「銀時、戦えるか？」
伏せたまま、のどが裂ける勢いの大きな声だが、銃声で全然聞こえない。
銀時は正直言って余り聞こえなかったが、意図は理解した為頷いた。
桂は懐から黒くて丸いモノを取り出した。
黒くて丸いモノ――爆弾を銃声のする方へ放り出した。
ボンッ！と小さくはない音が大きくはない音が響いた。
銃弾が一旦止んだ。
銀時はサッと立ち上がって洞爺湖をしっかり握った。
桂も銀時と同じ時位に立ち上がっていたのか爆弾を投げた所に向かっていた。
一拍遅れた新八は腰にある木刀を握って二人に負けない勢いで走った。
まだ煙が舞っている中桂と銀時は飛び入った。
新八は真っ直ぐ入った。
土煙によって影しか見えないが、次々と倒れていくのが分かる。
新八も適当に木刀を下ろした。
目の前の男か、良く分からない人が「うっ…」と呻きながらドサッと倒れた。
煙が消えていた時には既に立っているのは銀時達のみだった。
銀時は僅かに意識がある男の頭に木刀を向けた。
「何の用だ？」
新八は倒れている男達を見る。

見て分かるような、耳が尖ってたりなど『あぁ、天人か』など新八は少しずつ混乱していた頭の靄を取り除いていく。
さて、銀時が男から情報を抜こうとした時――
予想もしなかった声がした。

「…どういう事だ万事屋？」

銀時達は声がした方を見た。
此処は公園。
さっき確認した限り人は居なかった。
だからこの天人達も銀時達を襲ったのだ。
では誰――？

向いた方には、

土方と沖田、そして近藤が居た。

笑顔って無表情よりもある意味恐怖だ。（前書き）

洒流奇：凄いよ、銀さんまたまた登場だよ！おめでとさん！

銀時：…何か屈辱だ。

新八：…ですね。

洒流奇：何で！？ちゃんとおめでとさんって言ったぢゃん。偉くない？偉くない？

銀時：偉くない。

新八：偉くないですね。

洒流奇：うわっ酷い。一様作者なんだから地位的には上だし。

銀時：権力は実質自分には何もない事を言ってるようなモンだ。ふっ。

新八：…。

銀時：どうした新八？

新八：いえ…その格好で言うかと…

銀時：んっ？

新八：自動販売機の下にある十円玉を取ろうとしている姿で言うのは…ちょっと説得力ありません。

笑顔って無表情よりもある意味恐怖だ。

「テメェ何で桂と一緒に居るんだ」

土方の鋭い視線が銀時に注がれる。
既に沖田は鞘に収めている刀の柄を握っていた。
近藤も普段の馬鹿そうな顔を引き締めていた。

「…」

銀時は口を動かさず、土方達をただ見ていた。

「何か言えよ」

「旦那ァ…言って下せェ」

「白夜叉だよ…コイツは…」

倒れていた男が口を開いた。
男は勝ち誇ったように笑った。
新八は目を見開いた。
拳を震わす。
桂は平然と土方達を眺めているだけだった。
銀時は倒れている男に何もせず、ただ見ている。

「…本当か万事屋」

「違うよな…？それは何かの冗談だろ？」
近藤は苦しそうに唇を噛む。
「俺は…」
銀時はやって口を開こうとした時、
「そんな事は後にして下さい！」
新八の叫びが響いた。
「事情聴取は後で幾らやってもらって構いません。ですけど、今は神楽ちゃんを助けに行く今は、止めて下さい」
新八の言葉に土方は「どぉゆう事だ」と問いただす。
「神楽ちゃんは春雨に攫われました。多分、この人達も春雨です。この人達はきっと船で僕達…いえ、銀さん達を狙って来ました…だったら！」
「その船に乗ってコイツらに運んでもらおうって事だ」
銀時はやっと下――男達を見た。
男は小さく悲鳴を上げた。
「俺を捕まえるか貴様達は。だが、それはリーダーを取り返す戦力が減るという事だ。勿論、貴様達は来なくて構わない」
桂の静かな言葉がやけに響いた。

「頼む、今は見逃してくれ」
銀時は小さく、つらそうに言った。
新八は頭を下げる。
土方達は顔を見合わせる。
「…どうする近藤さん。俺はあんたの意見しか聞かねぇ」
土方の問いに近藤は笑った。
「俺達も行く」
新八は頭を上げて、目を開いた。
「二人は構わないか？」
「俺はあんたについて行くだけだ」
「近藤さんが行くんなら俺が行かなくてどうするんですかィ」
二人の笑みに近藤は嬉しそうに頷いた。
「さて…吐いてもらおーか」
銀時は下で倒れている男を洞爺湖の先端でつつく。
「吐くか！テメェ何かに言っちまって何も得がねぇしな」

不適に笑う男を見た沖田が銀時に言う。

「旦那、コレは俺も加わった方が良いですかィ？」

「だなぁ…」

男の前に二人が立ち上がる。

「コイツに世界の厳しさについてたっぷりとな」

いやらしい笑みを見た男は――

今夜地獄を見る。

公園に奇声が響いた。

「話がある」とかって危険信号だから気をつけろ。（前書き）

神楽：私…何アル…？

銀時：食い意地がはったガキ。

新八：ボケの度を越した大食い少女。

神楽：何アル！？感動の欠片も無いネ！

銀時：事実だからな。仕方がねぇ。

神楽：久しぶりの前書きさんのそこん所に私が出たアルよ！？

新八：人気テレビから名前をもじるの止めた方が良いと思うけど…。

神楽：それが万事屋クオリティネ。

銀時：クオリティとか言っちゃ駄目だろ。もしかしたら人気漫画、家庭科ヒットマン非凡を連想する奴が居るだろ？

新八：家庭科ヒットマン非凡って何だよ！？作者が持ってる漫画の名前スッゴく変わってんだけど！つか家庭科のヒットマンって格好悪いよ。非凡って最早意味分かんねぇよ！てかコレ連想ゲームか！？

銀時：長ったらしいんだよ、テメェのツッコミは。何？著作権違反

してないよ？違反してると思った？

神楽：小さい男ネ。

新八：結局僕が悪いんだ！？

「話がある」とかって危険信号だから気をつけろ。

目覚めた神楽は瞼を擦る。

「神楽」

風雷の声に神楽は眠たげに答えた。

「何…アルか？」

「ちょっと俺また風呂入ってくっから、もし夜御飯運んできた奴が来たら話があるって言って止めといてくれ」

「分かったアル…フワァ」

欠伸を漏らした神楽を見た風雷は微笑みを浮かべ、傘を握ってまた風呂に入る。

おかしい、とは神楽自身が良く分かっていた。

だが、風雷は何をするかは皆目見当つかないが、何をしたいかは分かる。

此処から自分を出そうとしている事位、良く分かっていた。

だから、神楽は風雷を止める事が出来ない。

絶対に。

「…風雷、私…何アル…」

辛そうに呟いた言葉はドアの向こうの風雷には聞こえない。

神楽はそう思っていた。
だが、
その言葉は届いていた。

「希望だよ…」

風雷は優しく、神楽に聞こえない程度の音量で言ってから傘を見た。
風雷は地面にお尻を乗せ、傘に手をかける。
「最終チェックだ」と呟いた。
腰にあるポーチから小瓶を取り出す。
中には真っ赤な液体が入っていた。
それをクイッと口に流し込む。
やがて空になった小瓶をポーチに入れた。

「後、もう少しの辛抱だからな」

風雷は傘を開いた。

神楽は風雷が何をしているか分からない。
とりあえず体育座りをして待っていた。
すると、重たそうなドアがズズッと音をたてて開いた。
神楽はすぐに目をやる。
そこには、夜兎族であろうチャイナ服を纏い、神楽よりも一回りも二回りも大きな男が居た。

「飯だ」

短く言うと男は乱暴に置いた。

「待つアル」
神楽は出て行きそうな男の腕を掴んだ。
「何だ？」
「風雷が話があるって言ってたネ」
「知るか…んなもん」
そう言って男は神楽の手を引き剥がした。
神楽は『この男を倒せば出れるんじゃ…』と迷う。
でも、風雷が何か考えているかも…という事でどうする事も出来ない。
「話があるって言ったのに出ちまうのかよオッサン」
その声に男は頭を神楽より先に向けた。
神楽も一拍遅れて振り返る。
「風雷！」
「神楽、お前は風呂で汗を流してきな」
風雷は軽い足取りで神楽達の元に来ると神楽の頭を撫でる。
「…？」
「なっ？」

風雷の優しげな笑みに神楽は思わず頷く。

「分かったアル」

神楽は言われた通り、さっき風雷がいた風呂に入った。

「で、話って？」

気だるそうな男に風雷は見上げて、
自らの腕を引っ掻いた。

「…何のまねだ」

「舐めろ」

風雷は男の顔の前に腕をセットする。

「悪いが俺はそんな性癖はない」

すると風雷はアッサリ腕を下ろして、

「なぁ、質問」

と窓の方を見た。
赤ちゃんがギリギリ通れるか位の小さな窓の先にはただ闇が広がっている。

「監視はお前だけか？」

男は鬱陶しい様子で頭を横に振る。

「言えない」

「そうか」

風雷は分かっていた様に簡単に引いた。

「もうくだらない話は終わりか？」

「くだらなくは無いが、終わり」

男は「そうか」と言って重い扉を通り、閉めた。
風雷はしばらくさっきまで男が居た所を見ていたが、
視線を自分の腕に移すとペロリと舐める。

「あんたのな」

風雷の笑みが邪悪なモノに変わった時、

断末魔が響いた。

大体主人公は何かを手にすると強気になる。これが漫画の常識。（前書き）

今回は後書きに書きますー。

楽しみな人は居ないだろうけど…

大体主人公は何かを手にすると強気になる。これが漫画の常識。

風雷は腕の血が止まっている事を確認してから、神楽が居る風呂に入る。

「今の何アルか！？」

水を滴らせながら神楽は纏った服を靡かせながら入ってきた風雷に飛びついた。

「説明は後だ。出るぞ」

「出るって…？」

「地球に帰るんだ」

風雷と神楽は風呂から出る。

「でも扉は厚すぎて私達には開けられないアルヨ…？」

扉の前に立った神楽は頭を横に振る。

風雷は笑う。

「素手だったらな」

「傘でも…無理アルヨ…」

「傘じゃねぇよ」

「えっ…？」

風雷は傘から――
刀を出した。

「なっ…」

思わず絶句する神楽。
刀は一本では無かった。
二本あった。
そして、その刀は

黒い。

何をもを呑み込みそうな程。
そのうえ、その刀からは何か得体のしれないモノが出ている気がした。

神楽は下がった。

風雷は刀を一つ口にくわえて、もう一つの刀を右手に収める。
左手には閉じている傘を。

風雷は前に進み扉を、

切った。

あまり大きな音はしなかった。

ゆっくりと鉄の塊が落ちた。

「後ろについて来いよ」

風雷はそう言うと走り出した。
神楽は一拍遅れて風雷の背を追った。
外に出るとさっきの男とは違う夜兎族の男が延びていた。
風雷は出て、二手に分かれている道の右に曲がる。
神楽はついて行く。
トタトタ、タタタッと合わない足音が延々に続く廊下に響く。
数人の天人が道を塞いだが、風雷の手により意図も簡単に崩れる。
神楽は僅かに異変に気付く。
恐らく、神威達は何人か見張りを用意した筈。
少なくとも自分達を抑えられる位は。
なのに、さっきのような弱い奴達。
幾ら私達がナメられていても夜兎族なのだ。
雑魚ではない。
なのに――

「神楽、平気か？」

前からの声に神楽は僅かに上がった息を吐きながら「大丈夫アル」と答える。
見た限り、風雷の息は全く上がっていない。
自分達の道に倒れていく天人達を横目で見つつも、ただ走る。
何分走りつづけただろうか。
道が終わり、広い部屋に出た。
部屋の中には多数の船が並んでいた。

「神楽、こっち」

一つの船に乗り込む。
風雷は神楽を椅子に座らせると軽快なリズムで多数あるボタンを押していく。

やがて、ブォォォンと音が響いた。

扉の所が閉まりますと言わんばかりにピカピカ光る。
だが、風雷の刀が何時の間にか扉が閉まらないように置いてあった。

「風雷…？」

風雷は最後のボタンを押すと座っている神楽に向かって笑った。
そして、刀を取って、

出た。

「風雷！？」

神楽は閉まった扉に向かおうとしたが、
先に船が動いた。
勝手に動く船に神楽は何も出来ずにただ扉に向かう。
閉まった扉は開かない。

「風雷イイイィィィィーー！！」

神楽の悲鳴が響いた時には、
春雨の艦内から船は出ていた。

「イヤアアアアアアア！」

神楽の悲鳴は、

風雷には届かなかったのか。

大体主人公は何かを手にすると強気になる。これが漫画の常識。（後書き）

洒流奇：てかどうやって傘から刀が出てきたの？

風雷：傘の骨組みの２つが壊れてたのがキッカケだったな。最初は傘を直す為に必死こいて考えて刀で代用。今では丁度良い鞘だよ。

洒流奇：…。

風雷：ほら、だから何話前かの時中途半端に傘を開いただろ？全開したらバレるだろーから。

洒流奇：…。

風雷：何かおかしいか？

洒流奇：伏線パワー凄いな…ははは。

敵はぞろぞろ現れるが、主人公は一人っていう状態はありきたり。（前書き）

神楽：質問ネ。何で作者は毎回此処に出てるアル。良く居て邪魔な気がしてならないネ。

洒流奇：それは自然の定理だからだよ（＾ｗ＾）作者は何処かに出なきゃ何か孤独ぢゃん。普通だろ？

神楽：絵文字使うなキモい。

洒流奇：酷い！俺作者！

神楽：コレの作者は馬鹿が取り柄ネ。

敵はぞろぞろ現れるが、主人公は一人っていう状態はありきたり。

風雷は外に出たら刀を口にくわえ、今出発しようとしている船付近に傘を向け、

打つ。

カキンカキンと鋭い音がなった。

だが、それは銃弾が床に当たった音ではない。

銃弾が銃弾に当たった音だ。

「…ふぅ」

傘を下ろす。

船はゆっくり音をたてて出発した。

微かに神楽の声がする。

「自分の為に叫んでくれたのか」と呟くと風雷は前を向いた。

前には――

銃を風雷に向けている来島また子が居た。

「…あんたどうやったんスか」

「どうやって…？あぁ、あの男の人の事か？」

風雷はニコリとも笑いもせず、「毒で」と答えた。

「それは今どーでも良いッスよ。どうやって私が撃った銃をあんたの銃で撃ったのかって聞いてるんス」

「集中力で」

「不可能ッスよ。銃弾の速さを見える訳が無いッス。幾らあんたが夜兎族でも」

また子は風雷を睨み付けながら僅かに前に足を進める。

「無理だってやれたんだから、やれるんだろ」

「まぁ後で詳しく聞かせてもらう事にするッスから、傷を負いたくなかったら戻るッス」

また子の言葉に間髪入れずに風雷は答える。

「嫌だ」

風雷は刀を握りしめる。

「なら、仕方がないッスね！！」

一丁の銃はまた子の言葉が言い終わるか言い終わらない位の時に火を吹いた。

バンバンバンッ

銃から白い煙が出る。

風雷は体制を低くし、足を引いた。

そして、その引いた足が浮いた時には――
また子の前に居た。
「！？」
「おやすみ」
風雷は短く言うと、また子の腹に頭突きした。
また子の体が飛ぶ。
ドンッ！！
と音がした時にはまた子は壁に寄っ掛かって倒れていた。
風雷はまた子を数秒見、動かないのを確認すると船に乗り込もうとした。
そう、しただ。
パンッ
乾いた音が高らかに鳴る。
風雷はすぐに避け、銃弾が来た先を見た。
そこには、
薄っぺらい笑みを浮かべた死神が居た。
死神――神威だ。
その後ろには高杉と阿伏兎が居た。
傘の先を風雷に向けている神威の頬には真っ赤な液体がこびり付いていた。
「ぞろぞろ…人気者は困るな…アハハハ」
口では笑うが、表情は硬くしている風雷は口にくわえている刀を押して、落ちないようにする。

「神楽は逃げちゃったか。あらら。高杉、平気？」

「平気だ。そのガキが使える」

「はぁ…共食いは嫌いだったのによ…」

溜め息を吐いた阿伏兎の言葉に風雷は「あの男は？」と聞く。

「団長が殺したよ」

その言葉に風雷は寒気がした。
幾ら部下でも仲間の筈なのに。
仲間を…簡単に？

「どうして…」

思わず呟く風雷に神威は頭を傾げる。

「どうしてって…君がそう言う風にしたんでしょ？」

ビクッと風雷は体を震わせる。

「だからって…」

「でもそれなりに楽しめたかな？流石に阿伏兎の次位に強いって話だから」

名を言われた当の本人は倒れたまた子を担いで何処かに消えた。

「…仲間だろ？」

「だから…言ってるだろ？弱い奴には興味が無いって」
風雷は体が怒りで震えている事を分かっていた。
だが此処で理性を外したら、
ダメだ。
「でもアレどうやったの？」
「別に。あんたみたいに血を求めるように理性を司る部分を刺激しただけだよ」
「ふ～ん？どうやって？」
「…」
風雷は口をつぐむ。
神威は変わらない笑みで聞いてくる。
「質問タイムは後だ。まずは生け捕りにして聞きゃあいい」
高杉は刀を抜く。
「はいはい」
笑った神威の後ろには何時の間にか帰ってきた阿伏兎が佇んでいる。
「…こんなガキに三対一か？」
「このバカがやったらソレこそテメェは死ぬだろ」

「…俺が勝つって可能性は無いのか」

「そこまで楽しませてくれるの？」

「…」

風雷は神威という存在を心から恐怖した。

命のやり取りを神威はゲームのように、心底楽しそうに、言う。

ゲームの始まりだ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4467x/

流れる夜兎の血――罪か、希望か――

2011年10月19日08時13分発行